

台湾情報誌

交流

2018年2月 vol.923

公益財団法人 日本台湾交流協会

Japan-Taiwan Exchange Association

台湾アイデンティティに
つながった「環島」



交流

2018年2月
vol. 923

目次

CONTENTS

台湾アイデンティティにつながった「環島」……………	1
(一青 妙)	
続・演習林と珈琲の百年物語……………	8
(菅 大志)	
片倉佳史の台湾歴史紀行 第八回 高雄(8)―東沙(プラタス)島の歴史……………	18
(片倉 佳史)	
台湾情勢(2018年1月～2月) 兩岸関係の「裏側」で ―強まる中国の対台湾圧迫と浸透―……………	29
(大磯 光範)	
日本台湾交流協会事業月間報告……………	35

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人日本台湾交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人日本台湾交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

●● 日本台湾交流協会について ●●

公益財団法人日本台湾交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も大宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

台湾アイデンティティにつながった「環島」

エッセイスト・女優 一青 妙

一昨年(2016年)の5月末、台湾が世界に誇る自転車メーカー・ジャイアントジャパンの中村晃社長からの「台湾一周・環島のお誘いです」というタイトルのメールに、こんなことが書かれていた。

『一青さん、半分台湾人でしょ。台湾人なら台湾一周の「環島」をしないと』

最初は自分に台湾一周などという大それたことができるのか不安もあったが、中村社長の強い誘いに押し切られ、気がつけば、約半年後の11月に開催された“Formosa900”という、世界各国から台湾一周を自転車で走る人たちが集まるイベントに参加することになった。

この文章では、「環島」がなぜ、私のなかの「台湾アイデンティティ」を刺激するカンフル剤になったのか、みなさんにお伝えしたいと思う。

台湾人と日本人の間に生まれて

私は台湾人の父と日本人の母を持つ日台のハーフだ。生まれは日本の東京だが、生後まもなく台湾に渡り、幼稚園、小学校と11歳まで、台北の現地学校に通った。昭和3年、日本統治下の台湾に生まれた父は、母語が日本語のため、我が家の共通語は日本語。それ以外に、親戚と交わす台湾語や、学校で学ぶ標準語としての中国語(北京語)と、多言語に囲まれながら幼少期を過ごした。

味覚や基本教育は台湾仕込み。自分は「台湾の子供」だと思って暮らしてきた。ところが、父の仕事の関係で、11歳以降は生活の拠点を日本に移し、日本の中学、高校、大学へと進学した。

普通に日本語を話せたので、苦勞することなく、日本での生活にすんなりと馴染んだ。自己認識が「台湾人」から「日本人」へ変わるのに、そう時間はか

からなかった。

我が家で唯一台湾とつながりのある父は、私が14歳のときに肺がんで亡くなっている。以来、母と妹と、残された私たち家族の間で台湾を意識することは急速に減っていった。ときどき思い出したように、台湾に住む父の親戚たちと連絡を取っていた母も、私が21歳のときに胃がんで亡くなった。以来、妹と2人暮らし。「台湾」について、考えたり、話したりすることがない日々が続いた。避けていたわけではない。まったくその必要性がなかったのだ。

再び台湾と繋がったのは、それから20年ほどが経過して起きた、ある「箱」との出会いがきっかけだった。

箱は、両手を広げたのと同じくらいの大きさで、やや暗い赤みを帯びたベンガラ色の木製。これまで家族4人で住んでいた家の押入れの、奥底に眠っていた。

両親の記憶がつまった「箱」との遭遇

ずっしりと、体の芯にこたえるほど、寒さが重く感じた底冷えのする朝だった。2009年の冬、私たち家族4人で暮らしてきた一軒家が解体された。新しい家を建てるためなのに、ひどく喪失感に襲われた。

建て替えを決めたときから、家の整理が始まった。大量の食器、父が読んでいた本、母が着ていた洋服……。残すものと捨てるもの。たくさんものを取捨選択しているときに、大きな段ボールのなかの箱を見つけた。

この箱の中から出てきたのは、両親が結婚前に台湾と日本で交わしたラブレターや、父の闘病の様子を記録していた母の日記、私の名前が刻まれ



見つかった「箱」

た母子手帳、そして、両親が台湾で撮った写真などだった。

ひとつひとつ手に取り、目を通した。色あせていた台北の小学校の校庭、リヤカーを引いて豆乳を売りにきていたおじいさんの顔、空の青さなどが鮮やかに思い出された。忘れていた台湾の風景が走馬灯のようによみがえってきたのだ。

10年以上暮らしていたのに、ずっと空白となっていた台湾での記憶が、堰を切ったように、一気に目の前にあふれ出た。

思わぬ形で「台湾」に触れた私は、すぐに台湾に向かった。しかし、台湾を離れてからすでに30年近い月日が流れていた。飛行機から降り立った台北は、すっかり変わってしまっていた。台北101ビル、地下鉄が乗り入れる台北駅、通りに並ぶコンビニエンスストアなど、その全てに驚かされた。

幸いにも、昔、家族で住んでいた家はまだ残っていた。いまは知らない人が使っているが、外から建物を眺めれば、当時の生活がぼんやりと頭をかすめていく。

「パパはどんな人だったのだろう」

台湾の地に立ちながら、台湾人であった父がどのような家で生まれ育ったのか、どんな理由で日本に内地留学することになったのか、なぜ母と結婚したのか……。実は、自分の親なのに、私は何ひとつ知らなかった。

もちろん、14歳まで一緒に暮らしていたのだから、父の顔や声はわかっている。ただ、父の深い部分を知るには、私は幼すぎた。

父の記憶を尋ねて歩く

箱を見つけたことから、父や父の家族のことを知りたくなり、頻繁に台湾を訪れ、親戚や知人を聞き回って歩いた。

父の名は顔惠民という。台湾で「我姓顔（私は顔です）」と名乗れば、多くの人から「是基隆的顔家嗎？（基隆の顔家ですか？）」と聞かれる。そうです、と答えると、「很有名的大家族吧！（有名な大家族でしょ！）」との反応が返ってくる。

父の一族である顔家は、多くの台湾人がそうであったように、18世紀の福建省からの移民で、台北から少し北にある港町・基隆に居を定めた。日本統治時代の台湾で、金鉱や炭鉱の開発で財をなし、当時は台湾の「5大家族」と呼ばれた。

金鉱は九份にあった。九份はいま、スタジオジブリの作品『千と千尋の神隠し』の舞台であるとも言われ、赤い提灯と急斜面に続く階段のノスタルジックな雰囲気が人気を呼び、最近の台湾を代表する観光地となっている。昨今、観光列車として人気の平溪線も、かつての顔家が敷設したことを初めて知った。

基隆にあった父の生家は、日本家屋や西洋風の



ありし日の基隆顔家邸宅

建物が立ち並ぶ6万坪近い広大な土地で、湖のような大きな池もあったらしい。皇室が台湾を訪れた際の宿泊場所にも指定された。手入れの行き届いた庭園は、当時の台湾における三大名園にも数えられ、地元の学生たちが遠足の場所として訪れていた。台湾で数台しかなかった輸入車を保有し、運転手さんやお手伝いさんがいたという。話を聞いて回るうちに、本当に「大家族」であったことを実感した。

12人兄弟の長男として生まれた父は、10歳から親元を離れ、日本へ内地留学した。終戦後はいったん台湾に戻ったが、再び日本に密航という形で戻っている。40歳で結婚するまで台湾に戻らなかった。

結婚してからの父は、長男として家業を継いだため、私たち一家は台湾で生活することになった。ところが、父は心の病を抱え、酒とタバコに身を任せ、亡くなるまで、うつ病という状態から抜け出せなかった。

その原因は、アイデンティティの悩みにあった。日本人としての教育を受けた父。友人はもちろん全員日本人。話す言葉も、歴史観も、国家に対する概念も、すべて日本人のものだった。自分のアイデンティティを完全に「日本人」として捉えてきた父が、終戦を迎え、一転して「中国人（あるいは台湾人）」にさせられたのだ。

それまで仲間だと思っていた周囲の人たちは戦敗国である日本の国民で、自分は突然、戦勝国である中華民国の人間という線引きをされ、父は、それまで信じてきた全てのものが信じられなくなってしまったようだ。

台湾人でありながら、日本人。日本人になりきれない台湾人。日本人だと思っていた台湾人。国家とは、身分とは、人生とは何か、そんなことを問い続け、アイデンティティに苦悩した生涯だったということを、父が亡くなって30年以上経って、ようやく少し理解することができた。

両親の問題から、自分のアイデンティティへ



家族との記憶を綴った2冊のエッセイ

私は、そんな父を主人公とした初めてのエッセイ集「私の箱子（シャンズ）」（2012年、講談社）を書いた。父の姿が少しずつ浮き彫りになり、立体感を帯びたことで、父の心に数歩寄り添うことができたと思っている。

その後、父の物語から母の物語を紡ぎ、「ママ、ごはんまだ?」（2013年、講談社）という、母を主人公としたエッセイも発表した。

様々な人々の話を聞いて歩いていると、触発されたのか、今度は自分自身のアイデンティティを見つめなければ、と考えるようになった。

これまで、アイデンティティという言葉とは全く無縁だった。しかし、よく考えてみると、自分のなかには「日本人」と「台湾人」の2つの部分が確かに存在している。その「台湾人」の部分を掘り起こし、見つめてみたくなったのだ。

幼少期を台湾で暮らし、台湾の現地校で私が教わったのは中国からやってきた国民党による一党独裁のもと、いつか中国大陸に戻るという信念の「反攻大陸」をスローガンにした「中国人」としての教育だった。

授業で覚えさせられたのは、李白や杜甫の漢詩であり、中国大陸で最も長い川や山、中国5000年の歴史だ。歴史、地理、人物などで扱われる内容の大部分が中国中心で、台湾人であるのに台湾

を知らないまま学んできた。

台湾に足しげく通うようになり、各地で美味しいものを食べ、綺麗な風景を写真に収め、興味深い発見もいっぱいあったが、それでも「何か足りない、本当に台湾のことを私は知っているの?」という気持ちはずっと心のどこかにくすぶっていた。

そこに、冒頭の台湾の自転車メーカー・ジャイアントの中村社長からの台湾一周・環島の誘いが舞い込んだのだ。最近の台湾では「台湾人になるための儀式」として、自転車で台湾を一周する環島が受け止められていた。私は、何かに導かれるように、自転車での台湾一周チャレンジを決めた。



formosa900 の出走式イベント

台湾一周は 1000 キロ

ここからは、私の環島体験記を紹介していきたい。

「環島」とは、文字どおり、島を一周ぐるっとまわることを指す。中国語では「ホワンタオ」と読み、いま台湾で大流行している自転車旅である。

参加した Formosa900 は 2011 年に始まったイベントだ。ジャイアントの旅行会社、ジャイアントアドヴェンチャーのスタッフが参加者をサポートしながら環島できるツアーとなっている。およそ 700 人が集まり、1 チームは約 30 人。台湾の

各地から台湾一周を目指し、スタートした。

台湾は一周すると約 1000km になる。自転車での環島は、だいたい初心者から中級者は 8 日から 10 日かかる。1 日約 100km 走るという計算だ。上級者になると 6 日や 7 日で走りきる人もいる。私は、11 月 5 日に台北の市政府前を出発し、時計回りに、8 泊 9 日かけての台湾一周「環島」を始めた。

環島中の 1 日の動きは、おおよそ、こんな感じである。

朝 6 時起床。朝食後、準備体操を行い、出発。だいたい 20km ごとに休憩を挟み、再び走り出す。昼食後も同様に自転車に乗り、日が落ちる前にその日の目的地に到達し、夕食を食べる。夕食後は洗濯や翌日の準備を行い、布団に入れば瞬く間に眠り込み、また翌朝を迎える。

食べて、乗って、寝る。単純なことの繰り返しと心地よい疲労感が体を駆け巡る。まるで学生時代の部活動の合宿のようだ。

台湾は、亜熱帯と熱帯の両方にまたがっている。出発地の台北はまだ亜熱帯地域。台中から彰化、雲林と進み、3 日目に嘉義に入ると、熱帯と亜熱帯を分ける北回帰線を越えて、一気に熱気を帯びた空気が体にまとわりつき、周囲の植物も南の島らしく大きく変化した。

嘉義から台南にかけては、台湾の一大穀倉地帯が広がっている。台湾の教科書にも紹介されている日本人土木技師の八田與一が作った烏山頭ダムのおかげだ。台湾の稲作の多くは 2 期作なので、両側に広がる水田には、ちょうど 10 月末から 11 月にかけて、収穫時期を迎える稲穂が重そうに首を垂れていた。黄金色に輝く風景は圧巻で美しい。

最大の難所は山越えの「寿峠」

5 日目に、高雄から屏東に向かった。そして 6 日目に、環島のハイライトである「寿峠」と呼ばれている峠越えとなる。

台湾はさつまいもによく似た縦長の形をした島だ。島の中央には南北に3000 m級の山々が背骨のように通っている。東西の行き来には、必ず山越えをしなければならない。海拔460メートル寿峠は南側の山越えで、環島のなかで最大の難所とされている。

本格的なヒルクライムということで、自転車に乗り慣れている人たちは嬉々としてアタックし始めた。私のようにわかサイクリストは、どんどん距離を離されるだけでなく、お互いを励ます余裕もない。「加油、頑張れ、加油、頑張れ」をぶつぶつ唱え、自分を鼓舞しながら、頂上はまだか、まだかと、ペダルを踏み続けた。挫折して自転車から降りて推しながら坂を登る人も続出する。

峠の途中で、点在する先住民の集落をみかける。可愛らしい顔立ちの子供たちやカラフルに彩られた小学校、特徴のある壁画などにも出会える。台湾には現在、独自の文化を持つオーストロネシア系の流れをくむ16部族の先住民たちが暮らしているが、多くが南部や東部に生活しており、台北では見る機会が少ない彼らの文化を目の当たりにでき、テンションが上がっていく。

寿峠を越えられれば、環島はほぼ終えたようなものだ。長い長い坂道を一気に下り、通称「東海岸」と呼ばれている台湾の東側に到達する。西側から東側に移った途端、見えてくる景色は大きく様変わりした。無限に広がる太平洋の青さと、自然の



東海岸の景色はすばらしい

力強さを感じさせるのが台湾の東側の魅力だ。

高い建造物がほとんどなく、空が高い。天気が良ければ、夜空には満天の星が光り輝き、虫の音が響き渡る。思う存分太平洋沿岸に沿って走り抜いた3日間を経て、環島の一団は再び台北に入り、いよいよゴールを迎える。

9日間も走り続ければ、いいダイエットになるだろうと思われるかもしれない。しかし、「環島は太る」が参加者の定説だ。実際のところ、私も体重が2Kg増えた。理由はいくつかある。

旅の途中で、スタッフが休憩や食事に選ぶのは、ご当地でも有名な海鮮料理やスイーツのある場所が少ない。それは、主催者側の「おもてなし」の心からだ。美味しいものの魅力には勝てない。疲れているうえに、運動しているとの安心感も手伝って、ついつい多目に食べてしまうのである。

加えて、同行しているサポートカーに積まれたバナナやりんご、お菓子などを休憩ごとに食べてしまう。仲間から勧められれば手が出て、すっかりカロリーオーバーだ。私は、アルコールを飲まないが、飲む人にとっては1日の終わりのビールはたまらないらしく、環島一周で数万カロリーは消費しているはずだが、どうしても痩せることにはならないようだ。



環島中の食事は楽しみのひとつ

環島の楽しさは、走るなかで観光体験もできるところだ。

台湾のインフラの多くは、日本統治時代に日本人の手によって設計され、造られたものが多い。特に鉄道の敷設は、築100年以上の木造駅舎や、鉄道のトンネルなどが現在も残され、サイクリングロードや観光名所となっている。昔の製糖工場や海岸線沿いの廟など、普段の旅行では市街地から遠いのであまり立ち寄ることのできない場所に行くことができる。

今回の環島でも、温泉地で有名な台東の知本温泉や宜蘭の礁溪温泉、かつての鉄道トンネルをサイクリング専用ロードに改築した新北市の草嶺隧道、台湾一美味しいと評判の台南の伝統的な屋台料理店、日本統治時代に建設された雲林の西螺大橋、日本人建築士・伊東豊雄が設計した高雄国家



環島の際に立ち寄った屏東で

体育場などに立ち寄った。

「本当の台湾」に出会う

一緒に走った仲間は、ほとんどが台湾人。20代から60代と幅広い年齢層だが、意外にも多かったのは、40から50代の会社勤務のいわゆるサラリーマンだ。社会的に責任ある立場で仕事に精を出す大人が、なぜ一週間以上もかけて、ひたすら自転車のペダルを踏み続けるのか。とても不思議



一緒に走っている仲間たち

である。「どうして環島に参加したのですか」と環島中、参加メンバーに尋ね続けた。

「いつか環島するのが夢だった」「友達に誘われて」「仕事として仕方なく」「自分への挑戦」。答えは人それぞれだったが、環島を始めて日が経つにつれ、環島に対する思いは変化していき、一つに集約されたように感じた。

それは「いま私たちは本当の台湾と出会っている」という気持ちである。

台湾の各地の風景や人に出会い、美味しい地元グルメでお腹を満たし、目をみはる歴史的な建造物の存在を知る。こうした体験の一つひとつが「台湾を知る」体験であり、中国語では「認識台湾」と表現する。

自分が生まれ育った台湾という土地について、それまで曖昧であった認識が、環島を通して明確となり、「台湾人」としての意識が強まる。これこそが、台湾人が求める環島の醍醐味であることがわかった。

自転車のペダルを回しながら台湾の各地を走り、人々の息遣いや表情を手取るようにリアルに感じた。行く先々で受けた「加油！（頑張れ！）」という声援に、台湾人の優しさが伝わった。

環島の達成感はこのうえなく気持ちがよいものだ。日本人にもその楽しさを知ってもらいたいという願いを込め、昨年11月に、環島経験を記し



た「環島 ぐるっと台湾一周の旅」(2017年、東洋経済新報社)を出版した。

すっかり環島のとりことなった私は、2017年10月に、2回目の環島にも挑戦し、完走したばかりだ。

日本では4、5年くらい前から台湾ブームが始まり、ここ3年は、年末年始の海外渡航先人気ナンバーワンにも選ばれるくらい、台湾が日本人の間で定着した。雑誌で台湾特集が定期的に生まれ、「グルメ旅台湾」や「女子旅台湾」「癒される台湾」など、テレビ番組でも台湾を取り上げることが増え、ブームはさらに勢いを増している。

ただ、ちょっと残念なことは、台湾旅の定番が、2泊3日の台北であり、足を運ぶのは夜市や九份、台中、高雄といったお決まりのコースからなかなか広がらないところだ。台湾にはもっと違う顔がたくさんあることを、環島というひとつの旅のスタイルで発見してもらいたい。

環島の手段は自転車だけではない。台湾には、

同じように台湾を一周する形で、鉄道網が敷き詰められている。バス路線も日本以上に発達している。レンタカーを運転してもいい。時間があれば、お遍路さんのように、徒歩でも環島ができる。シェアバイクという形式も、台湾の各地方都市に整備されているので、鉄道とシェアバイクやバスの組み合わせで、自分流の環島を組み立てることも可能だ。台湾には、さまざまなスタイルで環島を楽しめるインフラとプランが整っているのだ。

今、私の生活の拠点は東京にある。東京に住んでいるからと言って、東京タワーや浅草には、数えるほどしか行ったことがない。日本の地方に出かけることも限られている。いつでも行ける、と思うことで、結局行かずじまいなことがほとんどだ。台湾に駐在している人にも、同じ状況があてはまる方が多いのではないだろうか。

自分の住んでいる場所、自分のルーツがある場所、そういうところを回ること、自分のアイデンティティの発見につながることを、私は「環島」から学んだ。2018年も、私は環島するつもりでいる。今度は、日本から日本人を連れて、台湾人と共に環島することで、日台の交流を実現させてみたい。台湾に興味のある方、ぜひ一緒に環島しませんか。



プロフィール

台湾人の父と日本人の母との間に生まれ、幼少期は台湾で過ごし、11歳から日本で暮らし始める。

エッセイスト・女優・歯科医として活躍中。著作に『わたしの台南』『私の箱子(シャンズ)』『ママ、ごはんまだ?』など。

続・演習林と珈琲の百年物語



菅 大志（北海道大学台湾同窓会・北海道大学農学博士）

はじめに

本誌 2017 年 12 月号の拙著「演習林と珈琲の百年物語」の最後に、「しかしながら、このときみんなであらった百年前に植えられたコーヒーは既にある。だから、この百周年を記念し、埔里の宝、演習林を守るためにもう一度埔里のみんなであら演習林にコーヒーを植えたいと思う。」と書き筆を置いた。それを書いていた 8 月頃は、まだこの「コーヒーを植えたい」という夢を諦めていなかったのである。

そして、2017 年 12 月 15 日、埔里町の旧北海道帝國大學農學部附屬臺灣演習林にて、「埔里演習林珈琲傳承百年・水沙連珈琲節」が開催された（ポスター参照）。これは、1917 年に創設された北大台湾演習林の百周年を記念し、主催が埔里町役場、メインスポンサーとして地元の Feeling18、埔里在住の北大卒業生の私が発起人となって行われたものである。電車もない小さな田舎町の祭にも関わらず、千人を超える賑わいを見せ、スポンサー、主催者、来賓者、参加者みな笑顔で円満に幕を閉じた。このように、この百年祭（以下このように略す）は、開催当日だけ見ると、順風満帆に目的港に到着したかのように見えたかもしれない。

しかし、発起人の私から見れば、逆風満帆の日々であった。逆風でも帆船は進むことができるそうだが、開催当日まで本当に開催できるのか不安な毎日だった。百年記念祭ゆえに、必ず 2017 年 12 月までに行わなければならないため、延期不可能。開催一ヶ月前の 11 月、百年祭の趣旨であったコーヒーを植えることが不可能になり、一時は開催中止に追い込まれた。しかし、どんな逆風でも私をしっかり支えていたのは、前稿に述べた「北大に対する恩返し」と「絶対に最後まで諦めない」の二つの思いだった。本稿では、百年祭についてその舞台裏とともに紹介したい。



百年祭ポスター

「PULI 1931 海の向こうの珈琲園」

「KANO 1931 海の向こうの甲子園」という台湾映画がある。この映画は日本統治時代の台湾で嘉義農林学校（写真参照）が 1931 年台湾代表として甲子園に出場する史実に基づく物語である。

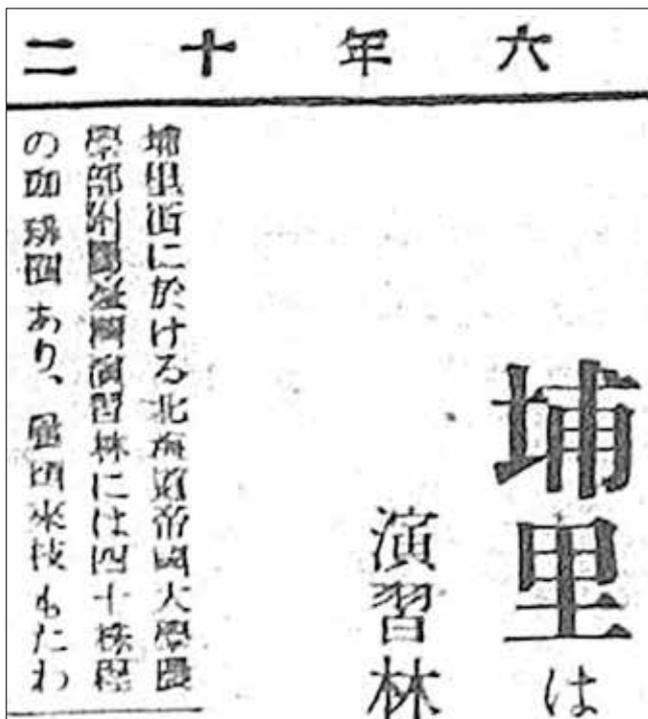


嘉義農林学校

どんな逆風の中でも嘉農球児達が甲子園出場、そして優勝を目指す「絶対に最後まで諦めない」根性は見る者の心をつかんで離さない。

丁度同じ年、「PULI 1931 海の向こうの珈琲園」があった。1931年の台湾日日新報に、「埔里街に於ける北海道帝國大學農學部附屬臺灣演習林には四十株程の珈琲園あり」とある(図参照)。埔里の北大では、甲子園ならぬ珈琲園で沸き立っていたのである。

日本統治時代の台湾ではこのように北大台湾演



1931年北大珈琲園の新聞記事

習林があり、さらに300人を超える北大卒業生が台湾各地で活躍していた。そして、この嘉義農林学校にも6人の北大卒業生がいた。初代校長を含む4人の校長、2人の教諭が、嘉農球児達をしっかりと支えていたのである。

校長は、初代、柳川鑑藏(1906年卒)、二代、樋口孝(1914年卒)、五代、鹿討豊雄(1922年卒)、七代、服部正夷(1923年卒)。教諭は、高橋信成(安藤信成)(1920年卒)、茶谷太郎(1928年卒)である。

このように嘉農球児達は北大の先輩達の教えを受けながら、甲子園を目標としていた。映画の中では、監督や球児が「甲子園!甲子園!」と連呼し鼓舞するが、それが私には「甲子園!甲子園!」ではなく「珈琲園!珈琲園!」に聞こえてきたのだ。さらに、嘉農球児達の「絶対に最後まで諦めない」根性は、まるで北大の先輩達からのエールのように心に響き、逆風満帆の私をしっかりと支えていたのであった。

台湾に渡ってきた北大卒業生にとって、北大台湾演習林の存在は心の支えになっていたに違いない。なぜなら北大台湾演習林にある北海道式菱葺屋根の事務所(写真参照)は、北大卒業生が見れば必ずや札幌の北大を思い起こさせるからだ。前稿で写真付きで述べたように、北大発祥の地にある重要文化財の時計台(1878年)、北大植物園にある重要文化財の博物館本館(1882年)、開拓の村にある北海道大学の学生寮(1905年)、北大にある有形文化財の古河講堂(1909年)、国の重要文化財、札幌農学校第2農場(モデルバーン)の建築群(1877)などに同様の菱葺屋根が使われているからだ。

だからこそ埔里に住む北大卒業生の私は、どんなに逆風でもこの菱葺屋根の事務所を守るため百年祭をやり遂げなければならない。それが、「北大に対する恩返し」になると信じ、「絶対に最後まで諦めない」と心に誓っていたのである。

ちなみに、菱葺屋根が北海道で多用された理由

として、興味深い話を北大演習林の秋林先生から伺った。それは、「この菱茸屋根は、雪に強い利点はあるが、雨音が反響しやすい欠点がある。しかし、北海道には台風や豪雨がほとんど無いため、この欠点とは無縁だったのではないか。」ということだった。



北海道式菱茸屋根の事務所

日本統治時代の台湾で活躍した北大卒業生

それでは何故、台湾から最も離れた北海道から300人を超える北大卒業生が台湾へ渡ってきたのだろうか。

台湾総督府は「工業日本、農業台湾」をスローガンに農林政策に注力していた。そのため、農学を修めた優秀な人材を渴望していたからだ。

丁度その頃、北海道の札幌では、当時日本最高レベルの農学教育が行われており、日本中から優秀な学生を集め、農学を修めた優れた人材を輩出していた。これが北大農学部（札幌農学校（1876-1907）、東北帝国大学農科大学（札幌）（1907-1918）、北海道帝国大学農科大学（1918-1919）、北海道帝国大学農学部（1919-1947））である。

領台当時、北海道同様に開拓の余地があった台湾において、北大での開拓精神の元、農学を学んだ人材はまさに打って付けだったのである。その結果、50年間で302人の北大卒業生が海路はるばる台湾に渡ってきたのだ。この数字は山本美穂子（2011）「台湾に渡った北大農学部卒業生たち」

から算出したが、これは本科生だけの数であり、実科生（北海道帝国大学附属農林専門部）を含めるとさらに増える。

台湾で特に評価が高く銅像にもなっている北大卒業生は3人おり、台湾糖業の父、台湾総督府技師、新渡戸稲造（1881年卒）、蓬莱米の父、台湾総督府中央研究所技師、台北帝国大学理農学部教授、磯永吉（1911年卒）、台湾紅茶の父、台湾総督府中央研究所魚池紅茶試験支所三代所長、新井耕吉郎（1925年卒）である。

この魚池紅茶試験支所は3人歴代所長がいるがすべて北大卒業生であり、初代、谷村愛之助（1915年卒）、二代、古市誠（1918年卒）、三代、新井耕吉郎（1925年卒）である。このように北大は台湾珈琲だけでなく、台湾紅茶にも大きく関与していたことは非常に興味深い。

さらに、農林教育方面でも北大卒業生は重用され、以下の学校の初代校長（学部長）は北大卒業生である。

中等教育として、前述の嘉義農林学校、宜蘭農林学校、屏東農業補習学校（屏東農業学校）、台南農業学校。

高等教育として、台北高等農林学校、台北帝国大学附属農林専門部、台中高等農林学校。

大学教育として、台北帝国大学理農学部。

特に、大島金太郎（1893年卒）は台北高等農林学校、台北帝国大学附属農林専門部を歴任した後、台北帝国大学創設準備委員となる。こうして台北帝国大学の創設に尽力した結果、台北帝国大学理農学部の農学系15講座のうち、14講座までも北大卒業生が担当教授となった。

以上のように、日本統治時代の台湾では農林分野で北大卒業生が大活躍していたのである。

発起人が提案した百年祭の趣旨

これまで述べてきたように、台湾で活躍する北大卒業生の心の支えとなっていたに違いない菱茸

屋根の事務所を守ることは、「北大に対する恩返し」となるに違いない。そのため、北大台湾演習林百周年記念事業として以下のように行いたいと考えていた。

埔里の北大台湾演習林には、百年前に植えられたコーヒーの木があったが今はない。

また、百年前に北大が建てた北海道式菱葺屋根を用いた事務所が台湾の歴史建築文化財に指定されているが、これを説明するものがない。

そこで

- ① コーヒーの植樹祭
- ② 歴史建築文化財の看板を作り除幕式

上記の二つを実行することによって、埔里の珈琲関連産業および観光業に「台湾珈琲の故郷」として付加価値をもたらし、百年の歴史建築文化財は、より歴史的価値を高めると考えていた。これは私個人の母校愛などではなく、埔里の町人の利益につながると考えていた。費用的にもコーヒーの木は私が準備するので、看板代だけである。単純にこれだけのことであり、協力者探しにこれほど苦勞するとは思ってもよらなかった。そして結局、この二つは後述する理由で百年祭で実行されずに終わってしまうのであった。

協力者を探す

この演習林の土地および建物は、現在台中にある中興大学の所有となっているが、維持管理は埔里町が行っていた。この取り決めは2005年に締結されたが、私はその際の経緯を早い段階から知っていた。そのため、中興大学を説得するよりも、埔里町を説得するほうが可能性があることを知っていた。そして、埔里町が動けば、中興大学も連鎖して動くに違いなかった。実際に埔里町は、管理の名目で様々な樹種の苗木を植えて緑化しており、コーヒーの木を植えるのも同じなのではないかと考えていた。

また、埔里町は「町長珈琲時間」(図参照)という野外イベントを毎月第一土曜日に行っており、その際には必ず埔里珈琲生産組合に協力を求めている。そのため、この百年祭を開催するにあたり考えられる最善の方法は、埔里珈琲生産組合が旗振り役となり、埔里町を主催とすれば、埔里町民と一緒にコーヒーの植樹ができるのではと考えていた。そのため、まずこの組合に入ることから始めることにした。



町長珈琲時間

埔里珈琲生産組合

2015年4月。私達夫婦は埔里珈琲生産組合に加入し、珈琲に関する具体的な勉強を始めた。しかし、埔里は「台湾珈琲の故郷」にも関わらず、生産者生産量ともに少なく、珈琲栽培だけで生計がなりたっている専業農家は一人もいなかった。組合員は20人いたが、殆どの組合員は先祖代々の農地を有効活用するために、趣味的に植えているという感じだった。そのため、埔里珈琲生産組合の活動は不活発で、「町長珈琲時間」を毎月第一土曜日に手伝う以外の定期的な活動は何も行っていなかった。しかし、その組合員の中で、非常に熱心に珈琲と向き合っている篤農家がいた。

この人をXさんとする。Xさんは台湾珈琲界では顔が広く、百年祭を実行するためには無くてはならないキーパーソンであった。つまりこのXさんを味方につければ鬼に金棒であるが、逆にX

さんを敵に回すと、Xさんとなつながらのある人まで敵に回すことになり、百年祭の成功はないといっても過言ではなかった。

Xさん夫婦と私達夫婦の付き合いは、組合加入後すぐに始まり、アポなしでお互いの家を訪問しあったり、台湾各地の珈琲園や珈琲イベントなどに4人で参加するほど良好な関係が1年程続いた。

2016年3月。「町長珈琲時間」で、Xさんに2017年に演習林が百周年になる話を持ちかけてみた。北大の話を出すと嫌われることがわかっていたので、埔里珈琲百年という歴史を強調して慎重に話してみた。ところが、この話に関してはXさんの反応は「無関心」であった。同月末の組合会議の議題に取り上げてくれるように頼んだものの無視され、私が議題提起することになった。結局この件以降、Xさん夫婦との関係は決裂してしまう。

2016年7月。3月の提案は少し早すぎたかも知れなかったが、その後、何も進まないことにあせりを感じ、7月にXさん夫婦、幹部夫婦、若手組合員と私達夫婦が参加し、もう一度百年祭について話し合いの場が持たれた。その結果、埔里珈琲の知名度アップにつながるとして、この百年祭のゴーサインがでた。そして、まず若手組合員が企画書をつくることになった。

2016年8月。この企画書が完成し、「町長珈琲時間」にてXさんに手渡した。結局それから9月、10月の「町長珈琲時間」で確認したところ、企画書が放置状態であったため、Xさんを通すことを諦め、私と妻は町長に百年祭について直訴した。

2016年10月。その結果、10月末に町役場にて町長とXさん、組合幹部、組合員、黄先生を含めた会議が行われた。この町長会議はこの百年祭の企画書を元に1時間ほど和やかに進み、そのままゴーサインとなった。2017年の秋以降を目標に、予算的にも問題は無いので、コーヒーコンテストも同時にやりなさいという町長さんの提案が

あった。

2016年11月。私の妻が臨月に入り、この百年祭の準備が思うように出来ないまま、とうとう2017年になってしまった。その後も私達夫婦が出産育児で何もできないばかりか、案の定Xさんに忖度して誰の協力も得られないまま、気がつくところの町長会議はまるで無かったかのようになっていた。

2017年4月。埔里珈琲生産組合の任期満了に伴う幹部選挙が行われ、百年祭を反対するXさんが再選された。その結果、この百年祭の企画を組合で進める可能性は完全に消滅した。

協力者が決定

2017年9月。埔里を代表する画家で、埔里珈琲大使でもある黄先生のアトリエでは、毎週金曜日の午前中、埔里の日本人が集まる。私達夫婦も参加していたが、9月1日に地元の有名店Feeling18 董事長茆さんが県会議員を連れアトリエに訪れていた。実は黄先生は私のことを常に心配して、様々な人にこの百年祭の話を打診し続けてくださっていたのであった。黄先生曰く、「日本人が諦めないで頑張っているのに、台湾人が諦めてはいけない。」と笑顔で答えてくれた。黄先生の協力がなければスポンサーは見つからなかったのだ。

9月8日。Feeling18の董事長茆さんの自宅にて、Xさん、黄先生、議員、埔里の名士、埔里の日本人を集めてこの百年祭について意見交換が行われた。ここに集まった人々は演習林が百周年であり、珈琲が植えられていた事実はもちろんのこと、菱茸屋根の事務所が特別なものであることに非常に驚かれ、「百年祭を是非やりましょう」ということになった。そして、このFeeling18 董事長茆さんがスポンサーとして正式に協力してくれることになった。

錨を上げて出航

9月8日 百年祭実行委員会として出航

9月22日 埔里町長が会議に出席

10月18日 埔里町長に中興大学への公文を依頼
毎週金曜日の午前10時から Feeling18にて、
茆さん、黄先生、イベント担当者、イベント業者、
埔里日本人会を主な会員として計12回会議（写
真参照）が行われた。尚、この会議のお陰で埔里
日本人会が発足した。

まず企画書を作成し、百年祭の趣旨、日時場所、
活動内容と担当者、協賛者、予算など極めて具体
的に準備が進み始めた。

活動内容としては、コーヒーの植樹祭、歴史を
説明する看板とその除幕式、珈琲豆飛ばし大会、
百人名人珈琲などを予定し準備が進められた。ま
た、LINEを用いてサポートメンバーを募り、会
議の内容などを報告した。

Xさんはスポンサーから埔里珈琲生産組合の代

表として、参加が強要されていたが、4回目以降
会議に参加しなくなり、11月10日に百年祭参加
を拒否したが、百年祭当日までLINEのメンバー
は続けていた。

暗礁に乗り上げる

10月19日。中興大学演習林責任者に企画書を
提出

11月2日。中興大学がコーヒーや看板に難色
を示す

11月6日。埔里町を通じ中興大学へ公文を提
出

埔里町が百年祭の企画書を公文として中興大学
へ送ったため、その公文内容は受理されるはずで
あった。ところが、私が希望したコーヒー植樹と
看板設置は両方とも拒否され、土地の使用にあたり、
幾つかの禁止事項が課せられた。こうして中
興大学がこの百年祭への難色を示したために、一
時は中止の決断が下された。

しかし、私は二つの目標を失っても、「絶対に
最後まで諦めない」と訴え続けた。

逆風満帆で前進！

11月10日。開催日正式決定

11月18日。新聞に百年祭の記事が掲載

11月23日。ポスター完成

一時は中止を決断したが、土地の使用許可は取
れたので、強行が決定した。

このように、台湾では、約束は約束として存在
するが、それを守るか守らないかは別の話という
ことが良くある。

こうした理由で、中興大学を刺激しないように、
記者会見、マスコミ取材、宣伝活動、ポスターな
ど控えざるを得なかった。



会議中 奥中央は茆さん

北大演習林（札幌）に連絡

2016年4月11日。

3月に埔里珈琲生産組合の会議にて百年祭について提案したので、本格的な準備を始めるべく、北大演習林（現北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション）に埔里の北大台湾演習林が来年百周年を迎えるにあたり、台湾演習林の史料に関して問い合わせのメールを送信した。しかし、このメールに返信は来なかった。

2017年1月9日。

町長から百年祭開催のお墨付きを得たことを強調し、もう一度北大演習林にメールを書く。すると今度はすぐに返信が来た。このメールを返信していただいたのが、今回、百年祭に参加された間宮さんで、同じく参加された秋林さんを紹介していただいた。秋林さんによると北大演習林の会議記録に、台湾演習林のコーヒーに関する記述を発見したことを教えていただいた。

2017年11月12日。百年祭の開催日が決定し、秋林さんにメールを送ると、翌日メールを頂く。

2017年11月20日 秋林さん、間宮さんが百年祭に参加していただけることになった。

メールを担当した間宮さんによると、一回目のメールに返事をせず、二回目のメールに返事したのは、一回目のメールには北大卒業生と書かれていなかったからだを教えていただいた。つまり、北大卒業生という肩書きがなければこの返事はいただけなかったということである。埔里に住む北大卒業生の私以外にこの百年祭を実行できる人間はいなかったということであり、最後まで諦めなくて本当に良かったと思った。

また、12月11日に年に1度の重要な会議に出席するため、演習林長にあたる佐藤先生が参加できない代わりに、佐藤先生に挨拶文をしたためていただけることとなった。

12月5日 この挨拶文が完成し、先にメールでその内容を送っていただいた。これを読んだ瞬

間、私は百年祭当日、もし反対勢力に妨害され開催されることができなくても、それでも構わないと思った。これまでの苦労が一瞬で報われた思いに包まれた。

百年祭当日

12月10日日曜日。天気は快晴。前日まで続いていた雨も止んで最高のお祭日和となった。10日前からずっと天気予報を見て心配してきたが、杞憂に終わった。設営は完成しており、懸念して



来賓席



ブース

いた妨害もなさそうだった。出店としてブース(写真参照)が25個出来たが、1000人を超える人手に商品がすぐに売り切れてしまう店が続出した。また、埔里珈琲生産組合のブースもXさん不在

で置かれ、組合幹部を含む14人が参加してくれた。さらに、Xさんとながりがあった珈琲関係者も多数参加してくれたのは、本当に百年祭をやって良かったと改めて思った。

開会の挨拶

スポンサーの Feeling18 理事長 茆さん、埴里町長、県会議員、立法議員、黄先生の挨拶が続いた後、北大演習林の秋林さんが演習林長の挨拶文を読み上げた（写真参照）。この挨拶文には、百年祭への感謝の言葉とともに「これを機会に、私どもと埴里の皆様が、旧北大演習林を絆に友好関係を築いて行くことができると考える次第です。」とあり、70年の時を経て、台湾と日本で遠く離れていた旧友同志が再会できたような気持ちになり、橋渡し役となった私は嬉しくて胸が熱くなった。



秋林さん挨拶文代読

百人名人コーヒー

珈琲農家が栽培し、焙煎したコーヒー豆を、ハンドドリップして淹れてくれるコーヒーは、まさに最高のコーヒーの味わい方である。コーヒーの味を決めるのは、抽出する人でも、焙煎する人でもなく、栽培する人である。抽出や、焙煎はあく



北大演習林の間宮さんと秋林さん

までも栽培された豆のポテンシャルを最大限引き出す技術であり、まずい豆をうまくすることは出来ない。そして、珈琲農家は自分で栽培したコーヒー豆の特徴を熟知しており、焙煎も、抽出も、最適の方法を知っているからだ。さらに、今回は黄先生による演習林事務所が描かれ、「北海道大学 since 1917 埴里演習林珈琲百年」と書かれた珈琲カップにコーヒーが淹れられた（写真参照）。こうして飲むコーヒーは最高に美味しい。

珈琲豆飛ばし大会

日本統治時代この演習林では、黄先生が幼いころに、コーヒーの赤い実を食べた後、豆を飛ばして遊んだという。その演習林伝統の遊戯を同地で再現したものがこの珈琲豆飛ばし大会である（写真参照）。



珈琲豆飛ばしをする子供



「北海道大学 since 1971」の北大カップと赤いコーヒーチェリー

コーヒー豆の入っている赤い実は、コーヒーチェリーと呼ばれている（写真参照）。日本ではチェリー（サクランボ）の種を飛ばす大会があるが、珈琲豆を飛ばす大会はおそらく世界初となる。

このコーヒー豆飛ばし大会は、新結成した埔里日本人会のメンバーが審判となった。まず黄先生が始球式として模範演技を見せて開始した。この遊戯は恥ずかしさととの戦いであり、観客が見守る中、羞恥心に勝たなければ良い記録は出ない。通常コーヒーチェリーには豆が二つ入っているため、二回のチャンスがある点もユニークである。非常に好評であったので、優勝商品として北海道往復航空券を準備して、今年もまた開催する予定である。

日月潭の紅茶試験場

12月11日。百年祭の翌日、北大演習林のお二人を連れて、今回のもう一つの目的であった紅茶試験所（茶業改良場魚池分場）を訪問した。この紅茶試験所は、前述したように北大卒業生三人が所長として活躍した、北大ゆかりの場所である。繰り返しになるが、北大は台湾珈琲だけでなく、台湾紅茶にも大きく関与していたことは非常に興味深い事実だ。

紅茶試験所の入り口にある『故技師新井耕吉郎 記念碑』に手を合わせてから中に入る。ここから先は、許可無く入ることができない場所である。どうして許可が必要なのかすぐにその理由がわかる。試験場は高台に位置しており、そこから見渡す日月潭はまさに息を呑むほどの美しさだからだ。そして、そこには、「台湾紅茶の故郷」と書かれた大きな石碑がどっしりとその存在を主張している（写真参照）。



台湾紅茶の故郷の石碑

少し進むと1938年に建造された製茶場を見ることが出来る。こちらの建物も演習林の事務所と同様に歴史建築文化財に指定されている。正面も素晴らしいが、裏側を見ると煙突と屋根付き丸窓があり北海道風情を感じる（写真参照）。



紅茶製茶所の裏側

さらに奥に進むと紅茶資料館があり、その2階に新井耕吉郎の銅像や史料が展示されている。その中には、初代所長の谷村愛之助（1915年卒）の名前も確認できた。私達は先輩達の息吹を感じながら、静かに銅像を眺め、自然にしゃがんで写真に納まった（写真参照）。

余談ではあるが、この紅茶試験所は埔里の北大から近く、新井耕吉郎のお嬢さんが埔里社尋常高等小学校に通っていた。そのため、私には新井耕吉郎がお嬢さんを連れて、北大事務所に立ち寄り、北大珈琲と北大紅茶を飲んでいる様子が目に浮かんでくるのである。



新井耕吉郎銅像

終わりに

結局この百年祭では、趣旨であったコーヒーの木を植えることは出来ず、歴史建築文化財の看板を立てることもできなかった。そもそもこの演習林は埔里町民に開放されており、禁止事項など何も無い。そのため、この演習林は24時間自由に入ることができ、コーヒーを植えている人もいる。これにならって私も百年祭終了後の2017年内に用意していた百年前に北大が植えたコーヒーノキの子孫の苗を10本植えた。寝た子を起こすようなやり方をせず、郷に入っては郷に従えで、初めからこうすれば良かったのだろう。

また、看板は作れなかったが、こうして現在ま

で北大台湾演習林に関する報文が日台で3本掲載され、新聞記事にもなり、百年祭を盛大に行ったことで近隣住民から苦情が来るほど演習林が注目され、この場所が北大であったということは今では埔里の人々の周知となった。そのため、百年祭ではコーヒーが植えられなくても、看板ができなくても、百年祭を「絶対に最後まで諦めない」根性で完遂できて本当に良かったと思っている。

2018年1月。長い間破損していた菱葺屋根の事務所の玄関部分がしっかりと修繕された。このことから見ても、この事務所は今後より嚴重に保存されることになるだろう。また、コーヒーを植えることが許可されなかったということは、それほど中興大学にとってコーヒーが大切なものであったという証拠でもある。今後、中興大学はこの演習林とコーヒーの歴史を復活させてくれるに違いない。

北大演習林から参加していただいた秋林さんと間宮さんには、北大ゆかりの珈琲と紅茶をお土産としてお渡ししたが、これが北大関係者の間で大好評となった。北大が珈琲を栽培していたことや、北大卒業生が紅茶の栽培を研究していたことは全く知られていないからだ。さらに、北大では、温かい珈琲や紅茶を飲みながら研究する伝統がある。そのため、珈琲や紅茶は北大では必需品とも言えるものなのだ。そこに、北大とゆかりがあり、美味しいとくれば、それは欲しがる人も多だろう。

そのため、今後は北大生協と北大台湾同窓会が協力して、北大珈琲・北大紅茶として商品化する方向で話を進めることとなった。これらが北大珈琲・北大紅茶として商品化されれば、近大マグロと同様に話題となり、日本統治時代の台湾と北大のつながりが、より多くの人に知っていただける存在なるに違いない。その日を夢見て。

片倉佳史の台湾歴史紀行 第八回

高雄 (8) —東沙 (プラタス) 島の歴史



片倉 佳史 (台湾在住作家)

台湾南部最大の都市である高雄市。その管轄地域は海の先にも存在している。前回、取り上げた南沙 (スプラトリー) 諸島に続き、今回は東沙 (プラタス) 島について述べてみたい。南シナ海の歴史、そして、知られざる日本との関わりについて紹介してみたい。

南シナ海の真珠と称される環礁

東沙諸島は、またの名をプラタス諸島と呼ばれる。中国大陸からはわずか 200 キロ、香港からは南東の方向約 330 キロの距離にある。島の面積はわずか 1.74 平方キロで、東側に環礁が連なっている。標高は低く、常に風波に晒されている。当然ながら、有史以来、長らく無人島だった。

ここは前回、取り上げた南沙 (スプラトリー) 諸島や、西沙 (パラセル) 諸島と同様、アジアの火種として話題になることが多い。しかし、東沙の海域は台湾 (中華民国) 政府の実効統治下であり、中国やベトナムからやってくる不法漁民との葛藤はあるが、現在のところ、武力衝突などは起こっていない。ただし、全域が管制区域となっているため、旅行者のみならず、一般市民も自由な渡航は認められていない。

現在、この島は中華民国政府の管轄下にあるが、終戦までは日本領だった。東沙のみならず、平田 (ひらだ) 諸島と呼ばれた西沙諸島、新南群島と呼ばれていた南沙諸島も日本の統治下に置かれていた。

なお、現在、西沙諸島は中国の実効統治下であり、南沙諸島は中国、台湾、ベトナム、フィリピン、マレーシア、ブルネイが領有を主張している。南沙諸島については中国と台湾、フィリピンとベトナムが分割実効統治を行っており、群島で最大の面積を誇り、唯一真水が出る太平島は台湾が統治している。



東沙島は東沙環礁と呼ばれることも多い。美しい海で知られ、息を呑むような光景に圧倒される。

「東沙」と「プラタス」

東沙島は古くからその存在が知られていた。宋国時代や元国時代にはこの海域にある島々について、その存在が知られていたようだが、確実な記録が残るのは明国時代に入ってからとなる。

具体的には、永楽帝の時代、南海遠征で知られる鄭和 (ていわ) の航海図に記載が見られる。鄭和は永楽帝による積極的な対外政策の一環で、7 回の大航海を行なったが、その中でこの島の存在を確認したとされている。図中には「石星石塘」の文字があり、これが東沙島を示しているという。

この島が中国王朝の版図に組み入れられたのは清国の第 4 代皇帝・康熙帝の時代だった。そして、対外的に「東沙」の名が登場するのは第 7 代皇帝・嘉慶帝の時代で、1820 年のことだった。

1866 年には英国船が暴風雨に見舞われ、ここに避難したという記録があり、プラタス島という呼称はその際の船長の名にちなんだものとされる。ただし、これよりも前からポルトガル人やオランダ人はこの島の存在を知っており、1641 年に描かれた地図にはすでに「Plat」、「Platas」という記載が見られる。

なお、1908（明治41）年に台湾総督府が行なった調査報告書は『プラタス島視察報告』という名になっており、東沙島とは記されていない。後述する西澤吉治に絡む事件以来、日本によって編まれた文献では「東沙島」よりも、「プラタス島」という表現をよく見かける。



島には植物が繁茂しており、林投樹や桑が多く見られる。ただし、野菜などの栽培は難しい。

日本人とアホウドリ

日本人の南シナ海進出についても述べておきたい。明治時代を迎えた頃、多くの日本人が航海に出ていた。その目的は羽毛を得ることだった。こういった「探検家」や「冒険家」は、まずは南太平洋方面、そして南シナ海方面を目指していった。南シナ海を目指す者は台湾が日本の版図に組み込まれた1895（明治28）年を境に一気に増えた。特に、台湾南部の高雄が港湾都市として整備されると、ここを拠点に民間人による南方進出が進んでいった。

彼らが最も熱いまなごしを向けたのは、アホウドリである。別名「信天翁」とも呼ばれ、全長90センチ、翼を広げると2メートルにもなる大型鳥である。風を利用して羽ばたかずに飛ぶという珍しい鳥で、捕獲が容易なために乱獲に遭い、絶滅してしまったところが少なくない。

東沙島についても、アホウドリの棲息する東京都八丈支庁の鳥島を開拓し、巨額の富を得ていた玉置半右衛門（たまおきはんえもん）、そして、日本最東端の地である南鳥島（マーカス島）の開

拓で知られる水谷新六が1901（明治34）年に東沙島付近を探検したという記録が残っている。

ちなみに玉置はこの島にアホウドリが棲息していないことを知って開拓をあきらめ、水谷はアホウドリの代わりにカツオドリ（オサ鳥）を得ようと進出したが、本格的なものではなかった。

日本との接触が始まる

日本と東沙島の接点は諸説ある。1866年9月に八丈島の住民34名が同島に漂着し、漢人の漁船に救出され、香港経由で送還された。これが嚆矢と考えられる。

また、台湾総督府が編纂していた『台湾時報』（昭和14年11月号）によると、1902（明治35）年、基隆にあった西澤商店（後述）に所属する船頭の吉田という人物が神戸から与那国島を経て台湾に向かう途中で台風に遭い、福州に漂着。台湾に戻ろうとしたが、再び暴風雨に遭って南シナ海に流され、たどりついたのが東沙島だった。

この時、一行は船を安定させるために船底に石を積んだのだが、その石塊が凶らずも燐礫石だった。これが西澤商店の主である西澤吉治（にしざわきちじ）の探検欲を掻き立てることになったのは言うまでもあるまい。

1905（明治38）年には貿易商社「恒信社」の長風丸が東沙島に達しており、同社は翌々年にも長風丸を東沙島に向かわせている。

続いて、1907（明治40）年の春には先述の水谷新六が「台湾丸」という帆船に乗り、香港経由で東沙島に向かった。水谷は同年9月8日の琉球新報に、最初の探検者としてコメントを残している。それによると、1902（明治35）年11月にアホウドリが群棲する島があると聞き、探検を画策した。調査の結果、下関条約で規定された台湾・澎湖地区の範囲外であり、同時にアメリカの統治下にあるフィリピンにも属さないことが判明し、探検を実行に移したという。

5月21日、一行は島に到達したものの、ここ

にはアホドリが棲息していなかった。その代わりにカツオドリが棲息することは判ったが、一行は落胆した。しかも、この時は吹き荒れた暴風雨に見舞われ、船を失ってしまう。そして、一行は無人数島に置き去りにされてしまった。

6月10日、台湾総督府は救助船「城津丸」を東沙島に派遣したが、一行はすっかり衰弱していたという。井戸を掘ったものの水質は劣悪で、無数に飛び交う海鳥は食糧にできたが、脂肪過多で下痢に苦しめられた。結局、魚と植物の芽を食べて飢えを凌いだと伝えられる。

なお、この時、漢人の漁師二人が島に立ち寄り、海人草（まくり）を採集する傍ら、タイマイ（海亀の一種）を捕獲していた。一行は彼らが造った小屋に寝泊まりし、鍋や釣り竿を借りたという。後日、水谷はその時の親切に感謝し、ブランデー1本とパンを与えたという逸話が残る。



この一帯は暗礁が多く、「魔の海域」として知られていた。プラタス島観象台（測候所）の建設碑。台湾日日新報より。

西澤島と西澤吉治

本格的な開発が始まったのは1907（明治40）年の8月からとされている。福井県出身の南洋貿易商・西澤吉治（にしざわきちじ）がこの島に到達し、「西澤島」と命名した。

西澤は基隆を拠点としていた貿易商であり、探

検家であった。水谷は燐鉱石の採掘には巨額の資本が必要なため、自身は断念するが、西澤に東沙島進出をけしかけた。二人は台北に向かい、台湾総督府殖産局長だった宮尾舜治を通じて、民政長官後藤新平と面会する。ここで実地調査と燐鉱石の採掘を願い出た。その際、後藤は「清国との間に厄介な問題が生じ兼ねない」と懸念を示しながらも、「無主の地であれば、採掘を始めても問題はなかろう」と回答したという。

これを受け、西澤は事業に着手する。行動は早く、1907（明治40）年8月8日午後4時半に105名が島に向かった。各種機材や建築資材を満載した「四国丸」は途中、澎湖（ほうこ）に寄り、同月12日午前11時、東沙島に到着したとされる。

上陸は午後2時頃だったという。最初に行なったのは、長さ20メートルほどの竿を用い、日章旗を立てることだった。そして、木板に東沙島発見と探索の記録を記した碑を建てた。この時、島は「西澤島」、これに連なる環礁は「西澤礁」と命名された。

一行は宿舎の建設を行なって、島内の調査を始めた。そして、カツオドリの群棲地と燐鉱石の存在を確認したほか、貝殻類の採取も行なった。

この辺りについては林四郎という人物が『まこと』（昭和12年10月1日版）に思い出話を語っている。林は島の開発に携わり、技師長を務めていた人物である。それによると、1907（明治40）年5月に小笠原と琉球で募集をかけ、労働者を連れて島に向かった。この記事では、採掘した燐鉱石は高雄に運び、大日本人造肥料会社などに売り込んだという。

島には事務所や宿舎、医務室、倉庫、栈橋のほか、台車軌道（トロッコ）なども整えられていた。宿舎は木造家屋だったが、建坪100坪あまりの家屋もあった。また、地下水を得にくいということで、コンクリート製の大きな貯水塔や淡水化池まであったという。さらに自家発電施設を有し、電話なども整備されていた。

西澤島は北緯 20 度 42 分 3 秒、東経 116 度 42 分 14 秒の位置にある。典型的な熱帯性気候のため、ほぼ毎日スコールに見舞われる。夕方以降は過ごしやすく、高さ 5 メートルに満たない灌木が繁茂している。特に林投樹と桑が多かったという。

問題となったのは野菜が育たないことだった。種を蒔いても燐鉱石の多い土地では思うようには育たない。新南群島と同様、台湾島から様々な種子が持ち込まれたようだが、定着するものは少なかったようである。

一方、魚介類はとにかく豊富で、漁に長けた沖繩出身者に任せれば、一時間で 100 名分の食事がまかなえたという。同時に、海亀のタイマイも食料として重宝された。

台湾総督府が発行していた『台湾時報』には、1908（明治 41）年 6 月 16 日現在の人口が記載されている。それによれば、西澤島の人口は 424 人。内訳は内地人が 220 人、台湾人が 204 人いた（台湾にいた中国人を含む）。平均年齢は 27 歳と若かった。

大半は労働者だったが、医師が 2 名、女性が 25 名、子供が 17 名いたことも興味深い。労働者については、採掘夫のほか、農夫、漁夫、水夫、大工、左官、鍛冶屋がいた。出身地については、



鳥糞（グアノ）と燐鉱石の採掘が基幹産業だった。また、回虫の駆除薬として知られる海人草（まくり）の採取も盛んだった。



るえ見が場工に方右観外の島の時當

1907（明治 40）年 8 月 12 日、西澤は内務省に領土編入を願い出ている。台湾総督府は調査員を派遣し、実地調査をした。植物は川上瀧彌、地質は福留喜之助が担当した。衛生事情は比較的良好で、マラリアもなかった。

内地人の大半を八丈島出身者が占めていた。八丈島は西澤が初めて実業界に出た時の思い出の地である。なお、台湾人は澎湖、桃園、基隆の出身者が多かった。

西澤憲章と独自通貨の存在

西澤島は西澤吉治という人物による私有財産であり、西澤商店による「企業島」であった。

西澤はこの島で暮らすに当たっての規則を設け、住民に順守を約束させていた。島の人口は 400 名に達しており、しかも、八丈島や沖繩出身者、台湾人、そして福州出身の中国人労働者が混住していた。そして、血気盛んな男性が多いこともあって、しっかりと統率する必要があった。

これは「西澤憲章」とも言われている。台湾総督府が発行していた『台湾時報』（昭和 15 年 3 月号）によると、その内容は以下の通りである。

- (一) いかなる渡島者にも日当以外に月十円を給与する
- (二) 支払い計算は十日目ごとに行う
- (三) 喧嘩をした場合は罰金五十銭を科する
- (四) 賭博行為をした場合は罰金五銭を科する

- (五) 不明
- (六) 罰金は島民の共済に用いる。天長節、神武祭、紀元節等の祝賀に用いる。もしくは病苦者に与える
- (七) 酒は午後五時より七時まで、一人二合を限りに売る事を得る
- (八) 朝は二時に起床し、二時半に喫飯（きっぱん）のこと
- (九) 食事は毎日四度、無料にて給する
- (十) 毎晩、仕事の帰りに入浴せしめ、湯上り後、医師をして健康診断を施さしむる

これらはいずれも西澤自身が考えたものだという。労働者の健康面を考慮するのはもちろん、仲睦まじく暮らすためには、守るべきルールをしっかりと守ることが不可欠である。これは西澤自身が青年時代、近衛師団の軍属だった時代に培ったものと推測される。

また、西澤島にはこの島だけで通用する紙幣が発行されていた。これは「西澤島通用引換券」というのが正式な名前で、いわゆる「私紙幣」である。発行者は西澤商会。種類は1銭、10銭、1円、5円、10円の5種類あり、1円と5円、10円については台湾銀行券とほぼ同じ大きさだったという。

西澤島通用引換券

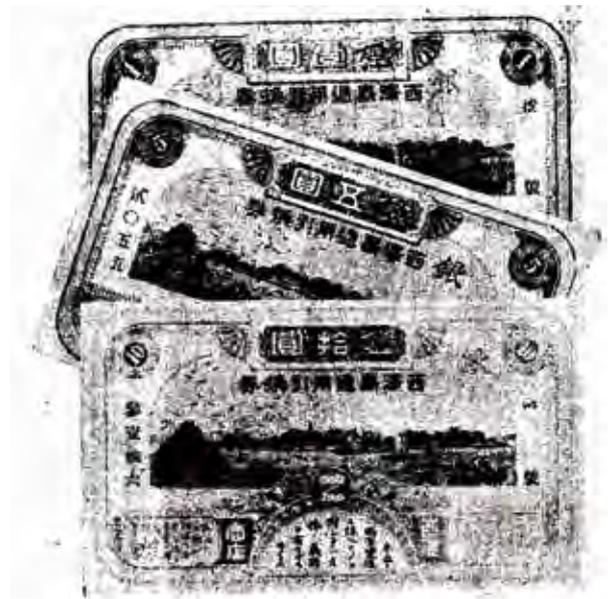
本券に依り西澤島内各販賣店に於て必要の物品と引換購入することを得るものなり

表面の金額正に相預り本券引換に基隆西澤商店にて現金相渡可申候也

本券ノ偽造變造ニ係ルモノニ對シテハ支拂ノ義務ヲ有セザルモノトス

西澤商店

なお、表面にはオサ鳥が大空を舞う様子が描かれていた。この私紙幣は西澤島が清国に明け渡されてしまった後、台湾総督府博物館に展示されたこともあったという。



西澤島には「通用券」の名で独自の通貨が発行されていた。発行者は西澤商店だった。『台湾時報』より。

西澤島の転機と終焉

西澤島の事業はおおむね順調だったが、転機は突然やってきた。それまではこの孤島にほとんど関心を示すことがなかった清国が領有権を主張し始めたのである。

1909（明治42）年3月、清国は日本に対し、同島の返還を要求してきた。そして、1908（明治41）年2月5日、マカオ沖で日本船第二辰丸が拿捕されるという事件が起きた。これに対し、日本は強硬な姿勢で清国を追究したが、これが民衆の反発を招き、大規模な日貨排斥運動へと発展した。

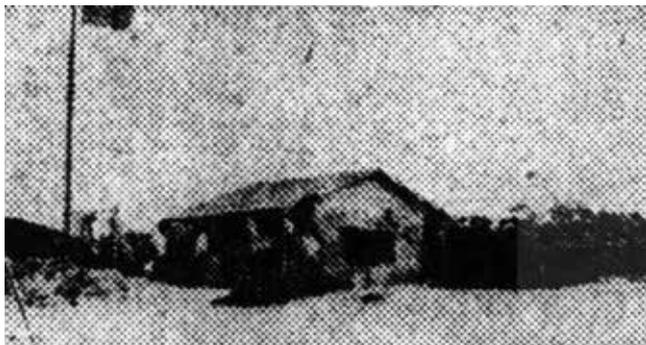
7ヶ月にわたる折衝が行なわれ、この島は清国領であるということで決着を見る。折からの経済不況に苦しんでいた日本は、清国との関係が悪化することを恐れ、終始弱腰だったという。結果として、清国は西澤の財産に対価を支払い、西澤は島の事業から撤退することになった。

ところで、日清両国間の折衝は西澤島の価値をどう評価するかという点が注目された。日本は実地立会臨検のため、軍艦「明石」を派遣し、これに前後して「音羽」、「鳥海」の二艦を送り込んだ。「明石」の艦長は後に総理大臣となる鈴木貫太郎

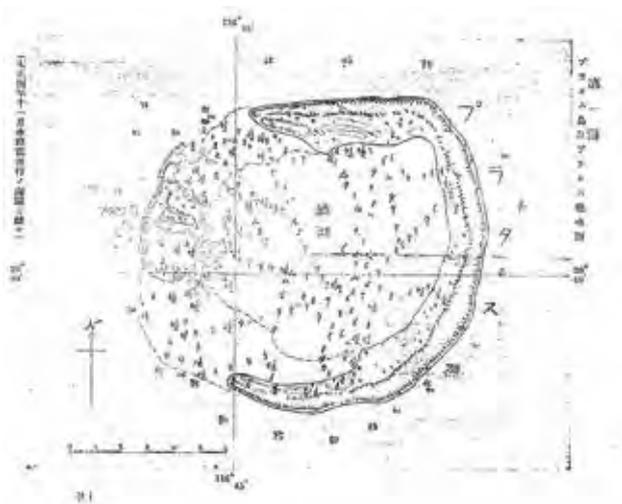
(当時は大佐) だった。

最終的に、日本側は同島の価値を 38 万円としたが、清国は 13 万元という額を譲らなかった。そして、賄賂を要求されたり、税金などを差し引かれたりして、西澤のもとに渡ったのはわずかに 10 万 6 千円だったという。これは西澤が他界する前日、息子の基一によって筆記された口述覚書によるものだが、島に投じた額は 60 万円以上と言われており、さらに、浅野セメントや台湾銀行などにも 40 万円という負債があった。

なお、「音羽」の参謀は秋山真之(さねゆき)だったが、秋山は巨額の負債を背負った西澤を不憫に思ったようで、後日、ドイツ領南洋諸島を占領した際、アンガウル島の燐鉱石採掘に西澤を起用するよう、骨折りしている。



清国領になった後も海人草(まくり)の採取は日本人の手で行なわれていた。台湾との往来は盛んだった。海人草採取の組合事務所。台湾日日新報の記事より。

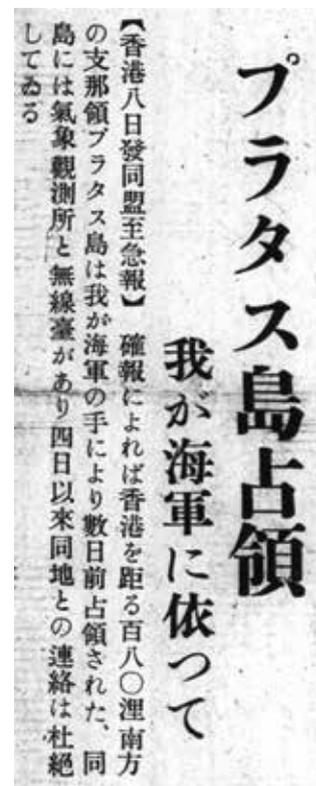


1917(大正6)年に描かれた地図。清国領になった後も日本との繋がりも継続された。『台湾水産雑誌』より。

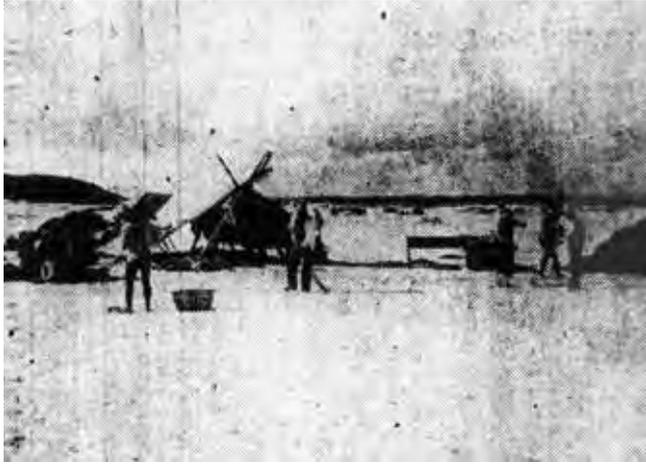
清国、そして中華民国統治下の東沙島

1909(明治42)年10月11日、東沙島は清国統治下に入った。しかし、その後の状況は何においても消極的で、芳しいものではなかった。英国香港政庁はここに通信基地を兼ねた気候観測所を置くことを清国に持ちかけたが、清国は自力で行なうとしてこれを拒否。しかし、当時の清国は財政難で、何もできないままに時間だけが過ぎていった。

また、燐鉱石の採掘についても、放置状態となり、中華民国成立後、ようやく動きが出るようになったが、西澤島時代のレベルに達することはなかった。それでも、欧米列強からの圧力もあり、気候観測所と無線通信所、灯台については整備された。この海域は暗礁が多く、魔の海域として恐れられていたので、灯台の重要性は高かった。ただし、財政難を理由に点灯されないことも多く、



西澤島は清国領となり、中華民国がそれを受け継いだ。1937(昭和12)年、日本が島を占領した。台湾日日新報の記事。



日清両国の協議で1909（明治42）年10月11日、西澤島の領有権は清国に明け渡された。西澤は大きな負債を背負うこととなった。

中華民国籍の船が航行する時だけ機能するという状態だった。

一方で、西澤島時代から絶えることなく続けられたのは海人草の採取だった。これは採取の利権を台湾にいる日本人に与え、行なわれていた。ただし、賄賂を要求してきたりすることが頻繁にあり、トラブルは絶えなかったようである。これが日本軍による占領に結びついていった。

1937（昭和12）年9月3日早朝、日本は折からの暴風雨に乗じてこの海域に入り、東沙島に上陸を果たした。そして、中国人を退去させた後、日章旗を掲げ、ここを占領した。つまり、この島は再び、日本の版図に組み込まれたのである。

それから終戦までの8年間については、史料・文献はほとんど残っていない。

西澤吉治という人物

西澤は1872（明治5）年8月15日、越前国鯖江藩の蔵役を務めた西澤為治の二男として鯖江に生まれた。若くして父と死別し、母を抱えて極貧の暮らしを強いられたが、苦学して商業学校を卒業。農商務省検査所に入り、ドイツ人技師について伊豆の温泉地帯の地質調査に当たった。しかし、21歳の頃に肺を患い、療養のために八丈島に渡る。ここで一年間ほど療養を行なった。これが後

に燐鉱石の採鉱夫の確保に繋がっている。

日清戦争が勃発すると、西澤は軍属として各地を巡る。これが台湾との接点となった。1895（明治28）年5月29日、北白川宮能久親王率いる近衛師団は台湾東北部の澳底に上陸し、台南まで行ったが、その後、西澤は基隆に住みついた。

基隆では回漕業を営み、基隆港の港湾内輸送を担っていた。同時に貿易商でもあり、探検家でもあった。

ほどなくして基隆港の築港が始まると、西澤の事業は一気に拡大した。後には浅野セメントの台湾総代理店にもなり、同社に関連した用地の買収なども行なっていた。この頃の西澤商店はまさに「朝日昇天」の勢いだった。

その後、東沙島と出会い、その開発に尽力した西澤だったが、時代の波に吞まれ、わずか3年あまりで西澤島の歴史は幕を下ろした。島を失った西澤は大きな負債を背負い、その後しばらくは神戸や東京を転々としていたという。この頃はラサ島の売却金で生活していたというが、日本海軍がドイツ領南洋諸島を占領するようになると、再び転機が訪れた。

ドイツ領南洋諸島のアンガウル島は東沙島と同様、鳥糞（グアノ）と燐鉱石で知られていた。海軍はドイツ人が行なっていた採掘事業を受け継いだ。その業者として白羽の矢が立てられたのが西澤だった。

時の海軍省軍務局長は西澤島の帰属問題に関わりのあった秋山真之。当時、西澤は困窮の極みにあったため、秋山は出資者として実業家の山本条太郎を紹介した。西澤は「南洋経営組合」を組織し、再び八丈島で採鉱夫250名を集め、再起を図ったが、これもシーメンス事件の影響で頓挫してしまう。

西澤の晩年は寂しいものだったようだ。1933（昭和8）年8月31日、伊豆河津村にて波瀾に満ちた人生を終えた。享年62歳。まさに全力疾走を続けた人生だった。



西澤吉治氏

西澤吉治が島と絡んだのはわずか2年あまりだった。しかし、南シナ海の歴史を見る上で、不可欠な人物であるのは確かである。

現在の東沙島を訪ねる

現在、東沙島は全域が高雄市に属している。これは1939（昭和14）年に南シナ海の島々が日本統治下に入った際に高雄市へ組み込まれたため、これが戦後に台湾の統治者となった中華民国政府に受け継がれている。

敗戦によって日本は台湾・澎湖地区の領有権と請求権を放棄し、その後の管理が中華民国政府に委ねられたのは周知の事実であろう。これによって、東沙島は広東省に編入され、後に海南特別行政区に属した。そして、1949年以降は高雄市に編入され、現在に至っている。

筆者は台湾政府の計らいで東沙諸島を二度ほど訪問した。この視察は台湾政府が主催したもので、この地が自国の実効統治下にあることを外国メディアを介してアピールするべく企画されたものだった。

最初に訪れたのは2008年7月23日のことだった。これは台湾政府行政院新聞局が主催したプレスツアーで、台湾に駐在する報道関係者55名が東沙島の土を踏んだ。これは外国人として、最初の訪問団となった。



東沙飛行場の滑走路は燐礦石の採掘場跡に日本軍が整備した。現在は1550メートルに拡張されている。

国軍輸送機で東沙を目指す

記者たちが乗りこんだのは物資運搬用のC130型軍用機だった。ロッキード社製で、通称ハリキューズ（ヘラクレスの意味）。運用効率の良さと輸送量の大きさから「輸送機の最高傑作」とまで言われる機材である。現在、米軍のほか、イギリス空軍、カナダ空軍、スペイン空軍、そして、日本の航空自衛隊にも導入されている。

座席はいわゆるベンチシートで、窓枠もミニサイズ。そして何より、機内に響く轟音の大きいことに驚いた。台北から東沙までは所要約2時間。台北を出てしばらくは台湾島の西岸を南下し、新竹付近から進路を南西にとる。そして、澎湖諸島上空を過ぎた後はしばらく海上を飛ぶ。

輸送機は定刻に東沙機場（飛行場）に着陸した。滑走路は立派なものだった。この滑走路は、もと



現在、東沙島は高雄市旗津区に属する。島には行政院海岸巡防署（海上保安庁に相当）の職員など、200名あまりが暮らしている。

もと1939（昭和14）年に、日本が整備したものである。当時は有効長600メートルほどだったが、戦後に1550メートルに拡張されたため、往時の痕跡は残っていない。なお、この滑走路は燐鉱石の採掘場跡を整備したものである。

美しい海と手つかずの自然

この日は好天に恵まれ、カメラバックに据え付けてある温度計は32度を示していた。しかし、心地よい風が常に吹き付けており、気温の割には暑さは感じない。

飛行場からはバスに乗って移動したが、その車両は「高雄市公車」と記された高雄の市営バスだった。東沙島は高雄市の管轄下であり、バス停も高雄市内で見かけるものと同じデザインである。

東沙島は平坦な島で、最高地点でも7メートルの高さである。地図を見ると、東西に約2800メートル、南北に865メートルほどで、中央部には大きなラグーン（潟湖）がある。干潮時の水深は1メートルほどとなっており、静かな水面をたたえている。

島は緑が豊富で、しかも潤いがたっぷりと感じられる熱帯性植物が多い。気候区分としては、熱帯モンスーン気候に属するが、風が常に吹き抜けているためか、過ごしやすい。ただし、台風の襲来は多く、日本統治時代の記録には、島全体が波に洗われるような状況もあったという。

小さな島ではあるが、豊かな自然生態を誇り、鬱蒼と生い茂った森がある。先にも述べたように、林投樹や桑が多く、こういった場所には昆虫が多く棲息している。また、鳥については140種が確認されている。かつてはカツオドリの繁殖地として知られていたが、残念ながら、これは乱獲によって絶滅している。

なお、二度目の東沙訪問となった2010年には、棧橋から沖合に出て環礁の周囲を航行する機会を得られた。透き通った大海原はもちろんだが、座

礁して朽ち果てた船の残骸などが遠くに見えた。風浪に晒され、強い日差しに照らされた残骸は海の蒼さの中で鈍く輝いていた。

現在、台湾政府は東沙環礁全域を国家公園（日本の国立公園に相当）に指定している。これは海洋生態の保護を目的としたもので、2007年11月17日に告示が出されている。

これは南シナ海で覇権を狙う中国や、ベトナム、東南アジア各国に向けた台湾の戦略だった。つまり、生態保護を目的とした管理地域を設けることで、戦禍から島を切り離すことを狙ったのである。

南シナ海に海底資源が確認されるや、諸国が権益を主張し始めたのは周知の事実であろう。そして、あからさまな海洋進出を狙う中国にとって、この海域は戦略上、極めて重要な地位を占める。現在、台湾政府が実効統治しているのは東沙島と南沙諸島最大の面積を誇る太平島のみとなっているが、両者とも南シナ海の要となる存在である。



2007年1月17日に陳水扁政権はここを「国家公園（国立公園）」に指定した。珊瑚礁や植生を研究するための施設が完成しており、常駐する研究員もいる。



東沙島唯一の廟。ここには「南海女神」と称される媽祖が祀られていた。これは形を変えて残っており、東沙大王廟と呼ばれている。現在は三国志の関羽を祀っている。



かつては高雄市が路線バスを運行していた。車両は「東沙 1 號」と名付けられている。2008 年撮影。

島に眠っていた日本統治時代の遺物

最後に、この島で最も印象に深く刻まれたことを書き記しておきたい。

筆者は東沙島を訪れた際、ここがかつて日本の統治下に置かれていた事実を証明できるものはないか、探していた。言い換えれば、「日本統治時代の遺構のようなものは残っていないだろうか」と気にしていた。

残念ながら、二度とも自由の利かない取材旅行だったため、個人行動はできず、丹念に探し歩くことはできなかった。構造物についても、滑走路は戦後に改築されているし、測候所は日本人が設けたものだが、すでに建て直されている。家屋や石碑なども存在しない。

それでも、筆者は現地に暮らす人々に会うたびに声をかけ、そういったものが残っていないか、尋ねていた。残念ながら、筆者の期待に答えてくれるような情報は得られなかったが、台北に戻る時間が近づいていた矢先、東沙島の自然生態を案内してくれた現地スタッフが走り寄ってきた。彼は息を切らせながら、おもしろいものがあると言って、手にしたものを差し出した。

「これは日本のものでしょうか？」

そう言って、彼は笑顔を見せた。

それはビール瓶であった。そこにはカタカナで「キリンビール」と刻み込まれていた。下には「DAINIPPON」の文字も見える。さらに、「K」と「B」を組み合わせたロゴも入っていた。戦時体制下の 1943（昭和 18）年、各メーカーの商標は廃止されているので、それ以前のもものと推測される。

また、四方に大海原が広がっている島なので、もしかすると、他の土地から流れ着いたものかもしれない。念のため、「このビール瓶はどこにあったのか」と尋ねてみた。すると、測候所に近い建物を改築した際、土中に埋もれていたのだという。それなら、戦前に、この島で飲まれたものと判断してよさそうだ。

筆者を乗せた輸送機は東沙島を離陸した。許可を得て、やや高い位置にある窓から島影を眺めてみた。すると息をのむような青い海が広がっていた。そして半世紀以上も眠っていた空き瓶。思わぬところで意外な遺物に巡り会い、筆者はもう一度、この島の歴史と西澤吉治に思いを巡らせた。

今後、揺れる政治状況の中で、この島がどのように存在していくのかは定かではない。しかし、美しい海原と手つかずの自然。そして、わずかな時間ではあるが、絡みのあった日本。秘境そのものとも言えるこの島だが、その魅力は決して小さくない。

取材協力：

中華民国国防部

行政院海岸巡防署

内政部營建署海洋國家公園管理處

行政院海岸巡防署南部地區巡防局東沙指揮部

行政院新聞局（当時）

陳怡如

故松丸耕作



島に眠っていたキリンビールの空き瓶。後ろには「DAINIPPON」の文字があった。



東沙環礁は馬蹄形をしており、干潮時には潟湖が浮き上がる。静かな水面が印象的だ。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた台湾のガイドブックはのべ40冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けるほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに、年間30回程度、講演を行っている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『旅の指さし会話帳・台湾』（情報センター出版局）、『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社）、『古写真が語る台湾日本統治時代の50年』（祥伝社）など。2012年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がける。最新刊は台湾生活情報誌『悠遊台湾』。『観光コースでない高雄・台南編』（高文研）を近刊予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店

<http://katakura.net/>



『台湾時報』に掲載された西澤島の概略図。運搬用に設けられた台車軌道が二路線見える。

台湾情勢 (2018年1月～2月)

兩岸関係の「裏側」で - 強まる中国の対台湾圧迫と浸透 -

日本台湾交流協会台北事務所専門調査員
大磯 光範

2017年、発足後1年を迎えた蔡英文政権は、その間に公務員・公立学校教員に対する年金改革法案を通過させ、台湾政治史における転機を生み出し、同年9月に頼清徳・前台南市長を行政院長へ迎えた後も、労働基準法修正案をはじめ重要法案の審議・可決を陸続と実施している。一方、台湾海峡対岸の中国においても、10月には5年に一度の政治祭典である中国共産党第19回全国代表大会が開催され、共産党中枢の重要人事が確定された他、習近平総書記による政治思想「習近平の新時代の中国の特色有る社会主義思想」が党規約に盛り込まれ、本年1月中旬に行われた中国共産党第19期中央委員会第2回全体会議（二中全会）では、同思想を憲法に明記することが確認された。3月の開催が予定される全国人民代表大会及び全国政治協商会議（两会）を経て、習近平の権力基盤はより一層強固なものとなることが予想される。

2017年は兩岸双方の政治にとり正に激動の年であったと言える。しかし同期間は、兩岸間の対話・意思疎通のための公式な会合は一度たりとも設けられず、当局間の往来が断絶するという、兩岸関係にとっては異常な年ともなった。兩岸当局による健全な対話や往来は息を潜め、双方関係機関の報道官が相手の措置を非難する「口水戦」に終始する現状にある。兩岸間の険しい雰囲気が続いた2017年が終わり、新たな年が明けた直後の1月4日、中国は突如、台湾海峡中間線付近を走る航路「M503」及びその支線となる「W121」、「W122」、「W123」の運用を開始し、台湾側の反発を招いた。また、台湾側は2日前の1月2日、昨年3月にスパイ容疑で拘束された中国籍男性・周泓旭に対す

る台北地方法院検察署による調査結果を発表し、同案件における中国国務院台湾事務弁公室や新党など台湾内部の政党関係者による関与が指摘された。

兩岸間の公式な交流が停滞する中、兩岸関係の「裏側」においては、中国による台湾の生存空間に対する圧迫や、台湾内部に対する浸透が実施され、これに対抗する台湾側との水面下での衝突が続いている。本稿においては、年初の兩岸間で生じた上記2つの案件を扱い、2018年の兩岸関係の趨勢を占う手がかりとしたい。

1. M503 航路「起動」の衝撃

航路「M503」の名が広く台湾社会に知られることとなったのは、今回が初めてという訳ではない。2015年1月12日、中国は台湾海峡中間線に沿う西側6海里地点を民間航空路線として新設した。中国側は、中国大陸部における航路の日増しの混雑状況を改善する需要の下での施行であり、国際民間航空機関（ICAO）の批准も経たものであると主張した。これに対し台湾側は、同航路は海峡中間線からあまりに近いため、台湾の防空警戒時間を減少させるものとなり、防空を目的としたコストが大幅に上昇する恐れがあるとして反発した。後に兩岸当局の間で同航路の南下運行にのみ同意する形で事態は沈静化した。しかし、本年1月4日午前、中国民用航空局は、同航路の北上運行及び支線の運用開始を発表したことで、「M503」は3年の歳月を経た後、再度台湾社会の眼前に出現した。



(出典：自由時報)

(1) M503 航路を巡る経緯

M503 航路の誕生は 2007 年まで遡る。現在、国家安全会議副秘書長（軍事担当）を務め、07 年当時同諮詢委員であった陳文政は、2015 年 1 月 15 日付「自由時報」に対し、07 年に中国側より M503 に関する通報を受けた当時（陳水扁・民進党政権末期）について以下のように語る。

2007 年 11 月末、台湾民航局は新航路の設定に関する中国側の通報を受けた。当該航路は（2015 年）現在と同様、海峡中間線から極めて近いものであり、2008 年 1 月より運用を開始するとの通告であった。右を受け、国家安全会議は直ちに検討に入り、各国駐在の代表処を通じ、中国側の通知について各国政府への伝達を行うと同時に、ICAO にて台湾を代弁しての発言と抗議の意を示すよう友好諸国に求めた。また、米国在台協会（AIT）を通して中国側へ圧力をかけるよう米国に要求した結果、中国による同航路の運用は見送られた。中国による「台湾いじめ」は周期的なものであるが、今般（2015 年）のやり口は 2007 年当時のそれと重複するものである。

7 年後の 2015 年初頭、中国は M503 航路及び 3 本の支線の運用開始を正式に発表。当時、馬英九総統の国民党政権期にあった台湾は再度抗議の意を示した。同年 3 月 2 日、兩岸当局は「航空運輸に係わる兩岸两会による協議（中国語：空運小两会，以下同）」において、M503 航路の一部運用、W121 等 3 本の支線は運用しないことで合意に達した。右をうけ、中国側は M503 の南下航路を 3 月 29 日 0 時より運行を開始する旨正式に発表。同日、上海・浦東空港を離陸した香港ドラゴン航空 KA857 便が初めて同航路を経て香港に向かった。

(2) 中国側による「一方的」航路運用開始

本年 1 月 4 日、中国側は、残る M503 航路の北上運航及び W121, W122, W123 の支線 3 航路の運用開始を正式に発表した。中国側が、兩岸間の同意を経ることなく、「一方的に」運用を開始したことに台湾側は抗議した。当局各部門は概要以下の声明を発表した。

① 行政院大陸委員会

中国大陸が兩岸の意思疎通を経ずに関連航路の運用を開始したことにつき、我々は、これが 2015 年 3 月の「空運小两会」が達した協議結果に違反するのみならず、故意に民間航空機を装った台湾政治ないしは軍事に対する不当な画策であり、台湾海峡の現状を変更する懸念を有するものと認識する。

② 交通部民航局

我が方は各航空会社に書簡により告知し、当該航路は兩岸双方の意思疎通と協調による確認を経ておらず、飛行の安全を確保するため、各社が

- 1 当初予定していたより 6 海里西側に寄る航路、且つ北から南への南下方向のみの運用に同意。
- 2 同 1 月 4 日付の大陸委員会発表のプレスリリースは、M503 航路の南下飛行のみの運用及び W 航路は運用しないことにつき、中国側は、右の運用開始時期については兩岸双方の意思疎通の後に確認することを保障したと示す。

同航路を利用することは適切ではないと呼びかけた。我が方航空管制部門は、大陸側による航空機の誘導を緊密に注視し、航空機が我が方空域に接近した場合には直ちに大陸側航空管制部門に抗議し、右が航空機を離脱させるよう呼びかける。

③国防部

中国当局が兩岸双方の協議を経ずに M503 北上航路の運用を開始し、3本の支線を使用することは、台湾海峡の飛行の安全を軽視するものである。国軍は海空域情勢の監視・偵察能力を強化しており、海峡中間線の東側に侵入したものは、何れも我が国空域の安全を脅かすものであり、国軍は「通常期間における突発的状況への処置に関する国軍規定」に基づき、遮断、警告及び退去措置を行う。

この他、上記声明が発せられた3日後の1月7日、蔡英文総統が頼清徳・行政院長と共に国家安全部門の責任者を招集して閣僚会合を開催し、中国側による関連航路の運用開始について、地域の安全と飛行の安全に重大な影響を及ぼすのみならず、台湾の政治と軍事に対する脅威及び挑発行為となるものであり、地域の安全と安定に衝撃を与えるものとして非難した。

中国国務院台湾事務弁公室は、1月17日の定例記者会見において、「2015年3月の兩岸間の対話において、関連航路の運用にあたっては事前に台湾側に通報すると示したが、これは同航路の運用に台湾側の同意を取り付ける必要があることを意味するものではない。1月4日の M503 北上航路等の運用開始にあたり、我々は台湾側に通報を行っている。大陸が2015年の合意に違反しているとの台湾当局の声明は事実に悖る」と表明し、台湾側の批判に反駁した。

(3) 航路問題は兩岸「力関係」の試金石か

陳水扁政権期の2007年、中国側は M503 航路を初めて世に問うた。民進党治世下の台湾当局はこれ

を受け入れず、米国や国際社会の助力を得ながらも、同航路の運用を中国側に一時放棄させることに成功した。2015年、同航路は再度議論の焦点となったが、国民党政権下の良好な兩岸情勢において、双方は協議により航路の一部運用開始に合意が為された。そして本年、M503航路と3本の支線は全面的な運航という「三度目の正直」を果たした。しかしそれは双方の協議を経た結果ではなく、台湾側にとって「一方的」な側面を有するものであったと言える。

陳水扁、馬英九、蔡英文と三代の政権にわたり問いかけられた本議題は、それぞれ異なる形での着地を見た。この差異が各期における兩岸関係を反映したものであるのか、或いは兩岸間の力関係の拡大により、今後も台湾にとり「一方的」結果が押しつけられる事例が多発することとなるのか。本件は、本年以降の兩岸関係の趨勢における先例となる可能性を有する。

2. 水面下で進む中国の対台湾統一戦線工作

2016年5月に民進党の蔡英文政権が発足して以来、中国側は「兩岸間の政治的基礎の欠如」を理由に台湾当局との公式な対話を拒絶している。所謂政治的基礎とは、「一つの中国」を体現するものとされる「92年コンセンサス」であり、中国側は、民進党政権が右に対する明確な態度を示していないことを以て兩岸当局間の正常な意思疎通が実施出来ない理由としている³。当局間の交流が停滞して1年8ヶ月、中国側は多様な手法により台湾に対する圧力を強めつつある。訪台中国人観光客

3 「92年コンセンサス」は、1992年に兩岸双方の民間機関である海峡交流基金会（台湾）と海峡兩岸関係協会（中国）の間で合意が為されたものであるとされているが、台湾側が「一つの中国、各自表述」、即ち大陸と台湾が共に「一つの中国」に属することを承認しながらも、双方が認識する「中国」は各自が表述するものとしているのに対し、中国側は「各自表述」に触れていない。

の規制により、民間交流を一部制限すると同時に台湾地方経済を圧迫するところから始まり、更に上記期間においてサントメ・プリンシペ及びパナマと台湾の断交、右2カ国と中華人民共和国との国交を樹立させる等の外交攻勢も展開された。そして、中国軍機による台湾「周回」や空母「遼寧」の台湾海峡航行、また、上記 M503 航路の運用開始といった軍事的側面を持つと見られる動向も頻繁に行われ、台湾に対する圧迫は日増しに強まっていると見られている。

こうした外部圧力と同時に、台湾内部に対する中国側の働きかけも強化されていると見られており、台湾側の注意を喚起している。中国による台湾内部或いは社会に対する影響力行使の試みは、一般的に「統一戦線工作（統戦）」や「浸透」といった表現により概括される。諜報員やその協力者による情報収集活動、或いは台湾各（公的、民間）機関に対する影響力の伸張を企図したものであるとされる。中国近現代史において、「統一戦線」は重要な意義を有する概念である。統一戦線とは、共通の敵を打破するため、或いは共通の政治目標を達成するため、分散した幾つもの勢力を結集してその実現を企図する動きである。代表的な例として、中国国民党と中国共産党による「国共合作」が挙げられるが、その最終目標は各地に跋扈した軍閥政権を廃しての中国統一や、日本の大陸進出に対する「抗日民族統一戦線」の結成であった。

台湾に向け展開される「統一戦線工作」の目標は兩岸統一であり、右にあたり打破すべき主要な敵は「台湾独立派（台独）」である。台湾に存在する多数の小政党には、親中姿勢を示すものや「統一派（統派）」とされるものも多数存在し、右に対する中国の関与が指摘されている。中国当局による台湾政党への関与の一例として、昨年12月の「新党」青年幹部に対する台湾当局の調査を挙げ、概観することとしたい。

（1）「統一派」政党幹部によるスパイ案件への関与

昨年3月、台北地方法院検察署は、一昨年に国立政治大学にて修士号を取得した中国籍の周泓旭⁴を、中国当局による台湾での情報活動に荷担していたとして拘留した。本年1月、台北地検は右案件に対する捜査を終了したとして、詳細な調査結果を発表した。以下はその概要である。

本案は、本署検察官が法務部調査局国家安全擁護工作チームを指揮し、被告・周○旭が所有する記憶媒体を差し押さえ且つ鑑識に送付し、右媒体内の削除された資料を復元したところ、「我が組織による台湾統一派工作の展開の手法と体得」、「星火 T 計画」、「療原企画案」等の他、「敬愛する党組織」との文言により始まる「入党申請書」等の電子データを取得した。また、被告・周○旭保有の上記復元データと強い関連性を有する第三者に対する捜査を同時に実施した。

周○旭は、台湾地区と大陸地区が目下依然として軍事的に対峙する状況にあることを明確に承知しているにも関わらず、国家の安全及び社会の安定に危害を及ぼす意図に基づく動機より、103（2014）年4～5月において、王○忠、林○正、侯○廷と陸続して知己となり、103年12月より国務院台湾事務弁公室の指示を受けた連絡窓口役を担い、上記三者が運営する「療原新聞ネット」、「新中華子女学会」等を利用、且つこれに参与し、必要経費の提供を行い、並びに活動計画や予算案、活動成果報告を定期的に行った。周○旭は上記の方式を以て我が軍関係者を物色し、大陸地区の行政、軍事、党務或いはその他の公的機関による台湾での組織的發展を画策した（台北地方法院検察署プレスリリース（2018年1月2日）より抜粋）。

4 周は「国家安全法」違反の嫌疑により、現在は上訴第2621号案件として審理中。同人を巡る案件概要については本誌「交流」2017年4月号の拙稿「台湾情勢（2017年2～3月）」を参照ありたい。



(俞正声・全国政協主席と新党代表団の会見(出典:新華社))

上記王、林、侯は、「新党」青年委員会幹部の王炳忠、林明正、侯漢廷の3名であり、昨年12月19日、法務部調査局は「国家安全法」第2条之1違反の疑いにより、同3名に対する捜査を行った。上記台北地検の報告は、中国籍男性・周泓旭の案件において、中国当局（國務院台湾事務弁公室）及び台湾内部の政党（新党）の関与が見られたことを明確に示すものである。王炳忠等に対する捜査に対し、中国国台弁は「兩岸の平和統一を主張する人士に対する台湾当局の不当な迫害」であるとして非難。新党は、当局による王等の扱いは法治の精神や人権を無視した不当なものであるとの見解を示した。本件に対する台湾社会の反応は様々であるが、1月3日付「自由時報」（1面）が報じるように、上記は中国当局による台湾「浸透」の一例であり、新党は統一戦線工作の主要な対象となっていると見る向きも存在する。

（2）中国の統一戦線工作と「統一派」政党

上述のとおり、統一戦線とは主要な敵に対する各勢力の糾合であり、対台湾における中国当局の敵とは「台湾独立派」乃至「一つの中国」承認を拒絶する民進党政権である。中国側は民進党関係者との接触をほぼ断絶させている一方で、台湾「統一派」政党との恒常的交流を維持している。最大野党・国民党は、「92年コンセンサス」との政治的基礎を中国共産党と共有しているため、ほぼ例年「国共論壇」

が開催され、両党首脳が会談を実施することが常となっている。上記の新党は台湾において地方の議席2席のみ保持する小規模政党であるが、昨年12月には郁慕明・同党主席率いる代表団が大陸を訪問し、俞正声・全国政治協商会議主席をはじめとする中国側要人との会見を行っている。国台弁プレスリリースは、双方は「一つの中国」原則を確固として堅持し、台湾独立に断固として反対し、平和的統一のプロセスを推進し、中華民族の偉大な復興のため共に力を尽くすことで一致したと発表するなど、中国側にとり有力な統一戦線工作の対象となっている。

新党とは如何なる政党であるか。同党は、李登輝総統時代に強まった国民党「本土派」傾向及び独立志向に反発する国民党籍立法委員を中心として、1993年8月に成立した国民党からの分裂政党である。1995年の立法委員選挙においては、164議席中21議席を獲得し、国民党、民進党に次ぐ第三勢力となる。しかし、後の選挙における得票率は下降線を辿り、現在、台北市議会の2議席のみ維持する「ミニ政党」となっている。同党が発表した「新党宣言」における「八項目の主張」には、国民党及び親国民党との三党協力の下、中国共産党との折衝の即時展開や、共生的な大中華経済圏の確立を求める等、現在の国民党に比してより積極的な統一志向を有する。

生まれながらに台湾が中国の一部であるとは意識しない、所謂「天然独」が20～30歳の年代の多数を占めつつあると言われる現下の台湾において、昨年末に捜索対象となった上記王炳忠（1987年生まれ）等「統一派」政党幹部として活動する青年層は少数派である。「中国人アイデンティティ」が希薄化する台湾の現状を憂慮する中国が王等に希少価値を見いだすことは想像に難くない。その点において、昨

5 当時、国民党は長期にわたる単独過半数の優勢が失われ、野党連合による国民党抑止の可能性が生まれていた。こうした情勢下の1996年、新党は当時野党であった民進党との協調により一致して立法院長選挙に臨むなど、「歴史的和解」を実現した経緯がある（二月政改）。

年末の捜査は「統一派」政党に対する中国当局の介入が表出したものであると見ることが出来る。

(3) 中国「対台湾統一戦線工作」の手法

中国は台湾の様々な方面に対する統一戦線工作を展開しており、上記はその一例である。台湾の政党に対する主な手段は金銭による「支援」方式が採用されることが多いとされる。前述の事案に関し、1月3日付の産経新聞は、上記台北地検の発表を引用し、新党幹部が設立した評論サイトの運営経費として、中国国務院台湾事務弁公室から2015年末までに20万米ドルが支出され、その後3年間、毎年1500万～1600万台湾元の支援が約束され、同幹部らは工作対象として台湾の軍人計6人分の資料を元留学生（周泓旭）に手渡していたと報じた。

こうした中国の対台湾統一戦線工作の全体像に関し、1月15日付の自由時報は「中国がターゲットとする十大目標、対台湾統一戦線工作に年100億台湾元をつぎ込む」と題し、その対象と手法を以下のようにまとめている。

①末端の村・里

台湾の郷・鎮・市や村・里（最少の行政単位）及びコミュニティと「連繫」し、友好協定や協力覚書への署名を通じ、「(中国における)同名の村」との感情的連結を模索。

②青年

「ひまわり学生運動」後、中国側は台湾青年による訪中交流、起業及び就業等により青年層を中国に引き込むことに尽力しており、人材流出を招いている。

③学生

長期休暇における講習・トレーニングを実施し、低価格或いは無料で学生を中国旅行に招待。昨年においては、学業成績が「平均標準(中国語:均標)」以上の台湾高校卒業生による中国での大学進学申請を許可し、且つ奨学金を提供すると発表。

④中国出身配偶者

中国側の指導を受けながら関連の政党や「統一派団体」と連繫し、陳情や街頭デモ等の手段による権利保護を訴え、政治的訴求を達成する。

⑤原住民

金銭や物資の直接的な提供という方式と同時に、活動経費や災害援助等の支援を通じ、中国に対するアイデンティティを拡大。

⑥親中政党及び政治団体

中国の台湾関係部門が台湾の親中政党、団体及び人士による政治参加を推進。台湾において関連の聯盟或いは組織を発展させ、台湾の選挙に対する影響力行使を企図。

⑦宗教

台湾における寺院等との交流を確立し、親中の民間宗教交流機関を育成。宗教活動や観光等のイベントを開催し、影響力を強化。

⑧同郷・親族

姓氏宗族、同郷コミュニティ等の血縁関係による感情的連結により、親族訪問やルーツ探訪等の方式により、兩岸の往来を協調。

⑨農業・漁業組合

目的を持った農業・漁業製品の購入や契約により利益を与え、民心を獲得。

⑩退役将校

「統一派」団体のアレンジの下、訪中して中国側が主催する記念活動に参加させ、(台湾)軍の(中国に対する)敵対意識を曖昧なものとする。中国当局は退役将校への取り込みによる兩岸の軍事的相互信頼提唱の機をうかがい、台湾の兩岸政策に対する圧力をかけている。

当局間のあるべき対話や意思疎通が停滞する昨今の兩岸関係において、中国側は台湾に対し、目に見える圧力と目に見えづらい浸透を並行的に駆使し、台湾各方面に対する圧迫を強化している。当局間の早期和解が困難な現下、正常な兩岸関係の「裏側」での暗闘は継続している。

日本台湾交流協会事業月間報告

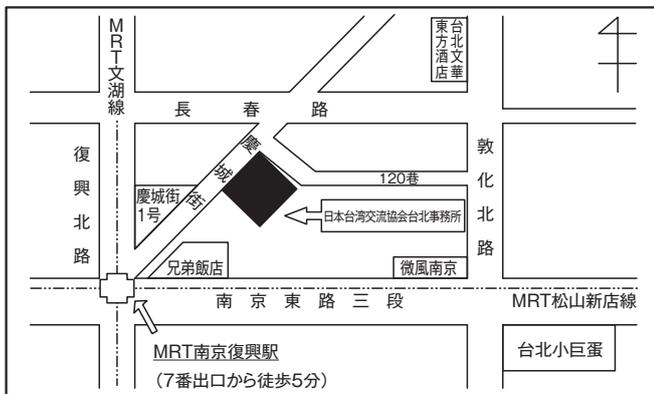
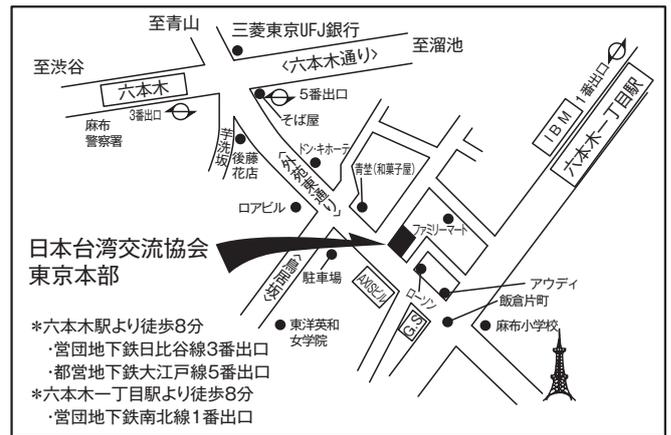
主な日本台湾交流協会事業（1月実施分）

1月	場所	内容	主な出席者（日）	主な出席者（台）
5-7日	台北市 新北市 台中市	福島吹奏楽連盟 55周年記念台湾公演	岩城光秀・福島吹奏楽連盟特別顧問（元法務大臣）、高城俊春・同会長、根本直人・同副会長（指揮）、田母神貞子・同理事長、平子ひさえ（独奏）、西海副代表、塩澤主任（台北） 他	林佳龍・台中市長、梁君堯（指揮）、鄧詩屏（独奏） 他
6日	桃園市	桃園日本語クラスお正月会出席	谷川主任（台北）	
10日	台中市	台中日本人学校、台中市政府訪問、領事出張サービス	西海副代表、谷川主任（台北）	
11-12日	台北市	台北日本人学校職場体験受入れ	谷川主任、塩澤主任（台北）	
9日	台中市	2017年第十一回住華杯日本語スピーチコンテスト出席	松永稔也・東海大学助理教授、小作雅一・住華科技股份有限公司資深顧問、中郡所長（高雄）	陳文瑤・大葉大学応用日本語学科副教授兼主任、葉淑華・高雄第一科技大学外語学院院长、鄧桂妃・住華科技股份有限公司副總經理
10日	台北市	日本人会主催ふれあいふえすていばる出席	沼田代表、谷川主任（台北）	
13日	屏東県	池上文庫 17周年記念大会出席（於：池上文庫）	中郡所長（高雄）、高橋・高雄日本人学校長、片倉佳史・台湾在住作家 他	劉耀祖・池上文庫名誉理事長 他
13日	台北市	2018年（第10回）北台湾大学院生連合研究発表会	塩澤文化室長、藤島夕紀代日本語専門家（台北）	呉如恵・銘伝大学応用日語系主任、曾秋桂・淡江大学日本文学系主任
14-20日	東京 愛知県	有力者招聘事業（経済部技術処羅達生処長）	内閣府、経済産業省、豊田市企画政策部 他	羅達生・経済部技術処長、張培仁・工業技術研究院（ITRI）副院長 他
15日	台北市	日本台湾交流協会台北事務所広報文化部発足		
15日	台北市	台湾経済事情説明会（日台産業協力架け橋プロジェクト東京和僑会）	南澤絃美主任、石田靖博貿易経済部次長（本部） 他	
16日	東京	台湾情勢セミナー（経済部技術処羅達生処長）	舟町専務理事、江藤貿易経済部長（本部） 他	羅達生・経済部技術処長、張培仁・工業技術研究院（ITRI）副院長 他
16日	台北市	商談会（日台産業協力架け橋プロジェクト 東京和僑会）	日本企業10社、横田光弘副代表、南澤絃美主任、石田靖博貿易経済部次長（本部） 他	台湾企業数十社、朱為正・台北市進出口商業同業公会秘書長、林允進・般若科技（股）總經理 他
17日	佐賀県	日台パートナーシップ強化セミナー	安永副長（本部）、ジェットロ海外調査部・加藤主査、三菱総合研究所・北田主席研究員 他	
18日	台南市	領事出張サービス（於：移民署台南市第一服務站）	鈴木主任（高雄） 他1名	
18日	台北市	台北市日本工商会定例会（沼田代表講演）	八木工商会理事長、沼田代表、横田副代表（台北） 他	
19-22日	台北市	谷崎理事長が頼清徳・行政院長、李大維・外交部長、呉釗燮・総統府秘書長、邱義仁・台湾日本関係協会会長他と会談	谷崎理事長（本部）	頼清徳・行政院長、李大維・外交部長、呉釗燮・総統府秘書長、邱義仁・関係協会会長

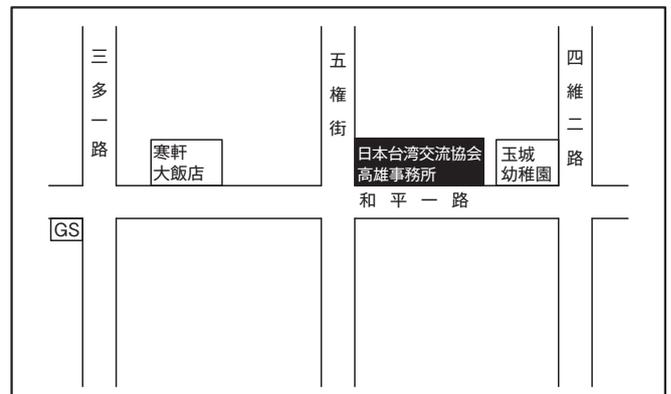
21日	台北市	日本語教育特別講演会	西原鈴子・NPO法人日本語教育研究会理事(講師), 塩澤文化室長, 矢崎日本語専門家(台北)	
23日	東京	大橋会長が河野外務大臣を表敬	河野外務大臣, 大橋会長, 谷崎理事長, 柿澤総務部長(本部) 他	
23日	台北市	サイバー適塾第16期海外視察研修団(関西経済同友会)来訪:台湾情勢ブリーフィング	サイバー適塾研修生37名他, 横田副代表, 宮越主任(台北)	
24日	高雄市	真贋鑑定セミナー出席(於:高雄税関)	山下次長(高雄), 福村主任(台北), 小林主任(台北) 他	陳金標・財政部関務署高雄関関務長(高雄税関長), 商品の真贋鑑定を説明する日系企業担当者等
24-26日	東京	ITI日本研修	みずほ銀行, 日本航空, パナソニックセンター東京, 住友商事	ITI研修生45名
26日	台北市	日本文化講座「短歌講座」(主催事業)	北島徹・開南大学教授(講師), 松原広報文化部長(台北)	
28-2/3日	東京 大阪市	有力者招聘事業(廖超祥・財政部関務署長)	舟町専務理事(本部), 小林主任(台北), 富岡副長(本部)	廖超祥・財政部関務署長 他
29日	東京	台湾情勢セミナー(台湾税関のデジタル化)	舟町専務理事(本部) 他	廖超祥・財政部関務署長 他
29-2/2日	東京 神奈川	中堅指導者招聘事業(呂曜志・経済発展局長)	舟町専務理事, 江藤貿易経済部長(本部), 星野光秀・独立行政法人経済産業研究所研究調整ディレクター	呂曜志・台中市経済発展局長 他
30日	東京	対日理解促進プログラム(JENESYS「防災」)第二陣開講式	柿澤総務部長(本部) 他	
30日	台北市	台北日本人学校運営委員会出席	西海副代表, 谷川主任(台北)	
30-31日	台北市	日本語パートナーズ台湾2期中間研修	阿部洋子・国際交流基金アジアセンター日本語専門員, 日本語パートナーズ台湾2期10名, 松原広報文化部長, 塩澤主任, 白田直子調整員(台北)	陳淑娟・東呉大学日本語文学系教授
31-2/6日	東京 福島県	プレス招聘事業(壹電視記者)	舟町専務理事, 江藤部長, 柿澤部長, 角田副長(本部)	蔡孟育記者, 呂漢威記者 他

平成 30 年 2 月 26 日 発 行
 編集・発行人 舟町仁志
 発 行 所 郵便番号 106-0032
 東京都港区六本木 3 丁目 16 番 33 号
 青葉六本木ビル 7 階
 公益財団法人 日本台湾交流協会 総務部
 電 話 (03) 5573-2600
 F A X (03) 5573-2601
 U R L <http://www.koryu.or.jp>

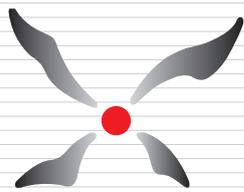
表紙デザイン：株式会社 丸井工文社
 印 刷 所：株式会社 白樺写真工芸



台北事務所 台北市慶城街 28 號 通泰大樓
 Tong Tai Plaza., 28 Ching Cheng st., Taipei
 電 話 (886) 2-2713-8000
 F A X (886) 2-2713-8787
 URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路 87 号
 南和和平大樓 9 F
 9F, 87 Hoping 1st Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan
 電 話 (886) 7-771-4008 (代)
 F A X (886) 2-771-2734
 URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top



公益財団法人

日本台湾交流協会

Japan-Taiwan Exchange Association

